

大学院におけるF D（授業改善）

—— 和歌山大学大学院経済学研究科の法学系科目を中心として ——

吉 田 雅 章

はじめに

学部段階におけるF D（授業改善）は多くの大学で精力的に取り組まれているものの、大学院に関しては遅々として進んでいないのではないと思われる。長く続く不況の中、少しでも早く就職したい学部生が多いため、定員確保することさえ困難な大学院で、F D（授業改善）に取り組むことは非常に困難である。

また、修士課程まで進学するのが当然と思われる理科系に対して、修士課程に進んだところで、社会人になるのが遅くなるだけとまで思われている文科系とを同一視することはできない。また、多くの大学院におけるマンツーマンの研究指導と、10～20人の講義とを区別する必要も存在する。20歳代前半の学部学生が少しでも早く就職したいために大学院の受験希望者を確保できない中、その穴を埋めるべく外国人留学生や社会人学生を受け入れている大学院が多いが、学力的には極めて問題であると言わざるを得ない。たとえ、法学部ではなく経済学部卒業でも、大学のゼミで法学系科目を専攻していればともかく、日本語を母国語としない外国人留学生や、長期間学園生活から離れていた社会人入試を経由しての入学者は、通常の大学院教育を受講する面で大きなハンデを背負っていると考えられる。その他、大学院が抱えるF Dに関する諸問題を検討する必要があるにも拘わらず、これを真正面から取り上げる研究は寡聞にして見当たらない。

そこで、本稿は、和歌山大学大学院経済学研究科の法学系科目を中心に、従来よりも低学力になっている大学院生のレベルアップを企図して、和歌山大学の本拠地である栄谷キャンパスだけではなく、岸和田サテライトや南紀熊野サテライトでの大学院科目をも含めて授業改善に取り組み、大学院生の学力ならびに資質の向上に努め、学生の声による検証を企図したものである。

なお、平成23年度から順次、小学校・中学校・高等学校において、新学習指導要領が実施されており、その一環として、法教育の拡充が図られている。従って、小・中・高等学校では法教育に対する意識も高くなっており、教員免許状更新講習において法学関連のテーマで講習を担当すると、定員がすぐに埋まるほどの申込者がある。しかし、その一方で、大学や大学院では「法教育は法学部や法学研究科だけの問題」と捉えている印象が感じられ、法学部や法学

研究科以外では法教育に対する動きは、やや鈍いのではないかと考えられる。

現代社会において、法は一般市民生活と切り離せないものであり、法学部や法学研究科以外の大学生・大学院生も修得する必要があるにも拘わらず、専門用語の難解さ、多人数講義における一方通行的な講義の無味乾燥さなどから、法学系科目が敬遠されがちである。実際、平成10年度よりFD（授業改善）活動に取り組み、さまざまな興味深い、あるいは知的好奇心をかき立てる魅力的な大学講義に接してきたが、法学系や経済・経営・商学系のいわゆる社会科学系の科目は、一般的に、大学の講義の中で最も退屈な部類に属するのではないと思われる。とりわけ、明治時代から開講されている法律のメジャーな科目は、教員が自分のノートを読み上げ、受講生がひたすら筆記するというのが古典的な講義形式であり、民法が「眠法」、民訴（民事訴訟法）が「眠素」などと呼ばれる所以である。最近では映画やマンガを取り上げて、少しでも受講生に興味を持ってもらうような努力も行われており、個人的には7・8年前から、テレビドラマや、法律問題を取り上げたテレビ番組や映画などを講義で使用するよう努めてきた。

そして、平成21年度から3年間にわたり、「学生参加型授業参観プロジェクトによる授業改善」をテーマとした研究で科研費（基盤研究C）の補助を受け、映画やテレビドラマ、テレビのドキュメンタリー番組、マンガなどのマルチメディアを利用して、受講学生の興味・関心を高め、その声を授業改善に役立てようという取り組みに挑んだ。

その結果、学部ゼミ生の中に法教育に関する卒論や民法教育の改善に関する卒論を執筆する者が多数出てきている。テレビや映画、マンガといった身近なメディアを題材として法律を学習することは、従来の条文や判例の解釈・説明を中心とした古典的な講義よりも、はるかに馴染みやすいということが明確であり、学期末に実施している学生による授業アンケートでも評価してくれていることがわかる。これこそがマルチメディアによる法学教育の改善である。

さらに、平成21年より導入された裁判員制度は、一般国民の司法参加を促すものであり、導入決定の少し前から、法学教育に関する国民全体の意識が高まってきているように思われる。そして、裁判の傍聴をしようという人も少しずつではあるが増えてきているようにも感じられる。実際、どこの地方裁判所でも、最初の裁判員裁判の際には傍聴を希望する人が多かったために、抽選で傍聴人が決定された。ちなみに和歌山地方裁判所における最初の裁判員裁判の傍聴希望者は競争率が10倍を超え、コンピュータによる抽選が実施された。20歳以上であれば、特別な事情がある場合を除き、誰でも裁判員になる可能性があり、マスコミでも大々的に取り上げられ、法学部や法学研究科以外の大学生や大学院生でも裁判員には興味を持っているはずである。

FD活動に着手してからは、法学関係の科目の受講学生に対して、実際の裁判傍聴や、裁判所や日弁連などが開催しているイベントへの参加とそのレポートを求めるようにした。その際、必ずと言って良いほどに、通常の講義に出ているよりも斬新で臨場感があふれているという感想をもらった。たとえば、刑事裁判に関しては、現実味があることと、手錠・腰紐をされてい

る被告人の姿を見て、衝撃を受けるとともに、自己の過去の行動を振り返ることが大きな収穫になっているものと思われる。民事裁判は大半が書面の取り交わしだけのため、学生には勧めていないが、学生の方から離婚裁判を傍聴したいと申し出てきたり、裁判所事務官採用試験を受けたいと言う者が出てきたりしている。また、和歌山地方裁判所や和歌山弁護士会等が開催するイベントへの参加を勧めても好評であった。このように大学のキャンパス外の場所へ行き、受講学生の心に響く裁判の傍聴やイベント参加は、フィールドワークを利用した法学教育の改善である。

本稿は、あまり動機付けをしなくても法律を学習してくれる法学部や大学院法学研究科ではなく、大学院経済学研究科の学生でも法学に関心を寄せる手段として、マルチメディアとフィールドワークを利用することが有意義ではないかと検討するである。従前の法学の講義ではほとんど考えられないものであり、極めて独創的であると考えている。マンガを利用した法学関係の書籍は一般書店でもチラホラ見られるようになってきているが、それらは、あくまで、当該法律の内容をマンガでわかりやすく解説することを試みたものである。しかし、本稿では、法学とは全く関係のないマンガや映画、テレビ番組、文学作品などを利用して、受講学生の法学に対する興味や関心を高め、知識の定着をはかることを目的とし、授業改善を図ろうとしたことを報告する。さらに、刑事裁判の傍聴は、小・中・高等学校および大学と恵まれた環境で育ってきた学生達に、非常に厳しい現実を直面させることであり、実に素晴らしい社会勉強である。前述の科研費「学生参加型授業参観プロジェクトによる授業改善」において、ここ数年で10名を超えるゼミ生から聞いたところであるが、近年、流行しているインターンシップが温室のような環境下での社会勉強であるのに対して、刑事裁判の傍聴は衝撃的ではあるが、極めて現実的で、身にしみる社会勉強であるという感想をもらった。裁判所では国民の司法参加の敷居を低くするために、団体傍聴に対して、さまざまな配慮がなされており、裁判の終了後、裁判官・書記官・事務官が直接、傍聴した学生に声をかけてくれ、弁護士会も大学生への働きかけとして団体傍聴と事前説明をしてくれ、検察庁も同様の対応をしてくれている。これらも大学院における法学系科目の授業改善として大いに役立つものであると考えている。そして、教育改善や、FDの推進と具体化に試行錯誤している全国各地の大学院の参考になるのではないかとと思われる。

1 和歌山大学大学院経済学研究科の現状と問題点

和歌山大学大学院は、設立順に従い、経済学研究科・教育学研究科・システム工学研究科・観光学研究科の4研究科に分かれている。そして、経済学研究科は、当初、経済学専攻（定員22名）と経営学専攻（定員15名）の2専攻（総定員37名）であったが、10数年前に市場環境学専攻（定員10名）が増設され、平成22年度までの学生定員は47名であった。ところ

が、平成23年度の観光学研究科の新設に伴い、学生定員5名を抛出したため、平成23年度より42名となった。経済学部定員が330名であり、修士課程だけ（研究者を目指す学生は博士課程を有する他の大学院修士課程への進学を目指すことが多い）であるにも拘わらず、これだけの学生定員は多すぎるのではないかと考えられる。平成16年度の国立大学法人化までは学生定員の不充足は、あまり大きな問題とは考えられていなかったもので、実際、平成22年度まで一度も定員を満たしたこともなく、ここ数年間までは85%を充足していないために、経済学研究科に対する予算を減額されたとも聞いている。およそ10年前より入学試験を研究計画報告書を中心にした30分程度の個人面接だけにし、学部生に大学院進学を奨励してきたが、あまり効果がなかったと言わざるを得ない。47名から42名に変更された平成23年度になって初めて、定員ちょうどの入学者となった。ただ、その学力レベルには大きな問題があるようで、また、およそ半数は言葉の問題がある外国人留学生（会話力に関してさえ問題のある学生が存在し、日本語能力向上のための講義も実施されている。さらに、学問研究のために留学してきたのに、授業料や生活費を稼ぐためにアルバイトに相当な時間を捻出せざるを得ないことも耳にする。）であり、毎年のことではあるが、修士論文作成・報告・審査がその後の大きな課題となる。（なお、和歌山大学の経済学部に関して、入学者の基礎学力の大幅なレベルダウンは問題となっているが、入学者数に関しては、これまでのところ、大した問題とはなっていない。）

1-1 EC（エキスパートコース）やサテライトの設置

ECは大学院生の増加を狙って、平成13年に始まり、何度か修正して来年度も継続されている制度である。すなわち、大学院へは4年間の大学生活を修了してから入学するのが通常であるが、ECは3年間で学部課程の単位を修得させた上で大学を退学させ（3年次卒業ではなく、これが不評である）、大学院へ進学させる制度である。従って、普通のEC修了生は学士号を持たず、修士号だけを持つことになる。5年間で大学院を修了できる点にメリットはあるが、その後の就職先がどのような取り扱いをしてくれるかにより、一長一短となる。多くのEC生は4年で卒業して就職する道を選択しており、発足当初は60名程度であったが、最近では20名程度に縮小され、平成24年度は3年次で退学することなく、4年で大学を卒業し、大学院への進学を目指すことに変更された。発足当初はEC在籍生の半数程度が大学院まで進学してくれることを期待されたが、実際には毎年2・3名程度しか大学院に進学しなかった。従って、大学院生増加の手段としてのEC制度は失敗したと結論づけざるを得ない。ただし、近年実施されている大学院修士課程2回生による修士論文中間報告会・最終報告会とEC3年次生による論文中間報告会・最終報告会とを比較して、前者よりも後者の方が優秀であるという声が多く、この点においてはECの存在価値はあったといえることができる。

次に、多くの大学が設置しているサテライトが、和歌山大学でも大阪府南部の岸和田市（岸

和田サテライト）と和歌山県南部の田辺市（旧・紀南サテライト，現・南紀熊野サテライト）とに存在する。両者とも18才人口減少に備えて，大学のPRと生涯学習の一環としての社会人学生の取り込みとに主な狙いがあると推測している。両サテライトにおいては，学部及び大学院の講義が平日の夕方や土曜を中心に開講されている。率直に言って，人口規模ならびに税理士試験対策を前面に押し出している関係で岸和田サテライトは順調であると思われるが，南紀熊野サテライトは受講学生数が減少傾向にあり，将来的には廃止せざるを得ないとも考えられる。なお，在籍者数において良好な状況にある岸和田サテライトに関しても，大半が税理士志望であるため，その指導体制が問題となっており，税法やその周辺の学問領域を担当する教員数が少ないため，税法専攻学生が多いことを手放しでは喜べない状況にある。

1-2 大学院におけるFDの試行的活動

学部における授業改善を目的とするFD活動としては，学生による授業評価，公開授業とその検討会，オープンプラスウィーク（和歌山大学では授業参観制度）など，様々な活動が全国の大学で取り組まれ，かなり浸透してきているように思われる。

しかし，大学院のFDとしては，受講生数の多い理工系の大学院やや専門職大学院を除いて，定番のFD活動はまだ登場していないように思われる。和歌山大学大学院では，システム工学研究科と教育学研究科において，公開授業とその検討会を実施して，大学院のFDと位置づけているようである。経済学研究科においては，学生による授業評価も公開授業とその検討会も実施することは断念した。経済学研究科の講義科目の大半が数人程度で，受講生数ゼロという科目もあり，逆に受講生が多い科目は（怠惰な大学院生が多いためか）大学院のレベルに至っていないという声が出ており，数年前の経済学部FD委員会では他研究科と足並みを揃えることはできないと決定した。

もちろん，魅力ある大学（大学院）作りの観点から，また，大学認証評価という観点からも，授業改善に取り組むべきとFD委員会では決定をした。そして，平成23年度に関しては，FD委員会の委員と有志の教員の科目に限定して，試行的に，受講している大学院生から当該講義に関する建設的な意見や感想を求め，それを委員長が集約するという事になった。学部のゼミ生よりも低学力の大学院生が現実存在しており，そのような大学院生の基礎学力を高める工夫の方が大事であり，そのための科目の開拓を今後の課題とすることの方が建設的と思われるからである。

1-3 外国人留学生に対する日本語の指導

和歌山大学には国際教育研究センター（IERセンター）という部局があり，受け入れ留学生の教育と生活支援を行っている。教育に関しては，日本語能力がまだ十分でない留学生向けに，同センターの専任教員が日本語教育・日本文化社会関連教育を提供している。大学院の外国人

留学生のおよそ半数は言葉の問題がありそうで(年により異なるが)、上記センターのみならず、大学院経済学研究科としても入学時に独自の日本語能力試験を実施し、外国人留学生の日本語能力向上のための講義を複数実施している。問題は、日常会話に関してさえ十分でない学生(意外と私費留学生が日本語に堪能で、逆に、文科省を窓口として多額の奨学金を授与されている国費留学生の日本語能力は極めて問題である)が存在し、学問研究のために日本へ留学してきたのか、アルバイトや奨学金で金儲けをするために留学ビザを取得することが目的であって、大学院入学はそのための手段に過ぎないと推測できる学生も存在する。実際、過去に入国管理局から、そのような留学生に関連して嚴重注意されたこともある。そのような学生の場合、修士論文作成・報告・審査がその後の最大の課題となる。また、自宅に引きこもり、大学へ出てこない外国人留学生も存在した。

1-4 飛び級学生や社会人学生の学力に関して

経済学研究科は学部3年次までに優秀な成績を修めた学生に対して、学部を退学して大学院への入学を認める飛び級制度が存在し、そのためのEC(エキスパートコース)まで存在するが、それを実践する学生は極めて少ない。3年次卒業が認められれば魅力があると思うが、退学をしなければならないので、学部生は不利益の方が大きいと感じているようである。しかし、岸和田サテライトに在籍し、税法科目を専攻する社会人学生は人数的には十分な成果を上げてきたといえよう。問題は、その学力であり、将来的に税理士となるために進学してきているのであるが、たった2年間で十分な学力を身につけているか疑わざるを得ない。当該学生は岸和田サテライトだけでなく、和歌山市の栄谷キャンパスでも大学院の講義を受講できるのであるが、多くの学生に関して基礎学力が十分あるとは考えられない。他の地方の大学院でも大都市にサテライトを設置しているが、その在籍生の基礎学力が果たして、どの程度のものなのか疑問を感じざるを得ない。

1-5 和歌山大学大学院経済学研究科におけるFD

前述したように、学部における授業改善を目的とするFD活動としては、学生による授業評価、公開授業とその検討会、オープンクラスウィーク(和歌山大学では授業参観制度)など、様々な活動が全国の大学で取り組まれ、実質はともかくとして、報告書の上では大学評価に耐えられるように、相当程度に浸透・充実してきているように思われる。

しかし、大学院のFDとしては、受講生数の多い理工系の大学院や専門職大学院を除いて、定番のFD活動はまだ見出されていないと思われる。和歌山大学大学院では、システム工学研究科と教育学研究科において、公開授業とその検討会を実施して、大学院のFDと位置づけている。経済学研究科においては、学部における学生による授業評価に代えて、受講生数が多くて担当教員が任意に受諾してくれた科目に限り、受講生の感想をメールで提出させるという、

学生による授業評価の自由記述に該当するものを実施したこともある。また、公開授業に代わる授業参観制度に関して、上記の2研究科同様に大学院の科目にも門戸を広げたが、実際に経済学研究科の講義を参観する教員は非常に少ないようで、実質的に経済学研究科では公開授業が実施されていない状況であるといえる。その代わりに、複数の教員が担当して大学院生の基礎学力を高めるための科目を試行的にいくつか用意しており、できる限り当該科目を受講するよう、教務委員会が指導教員を通じて奨励している。経済学部にはFD委員会が存在するが、単独で企画検討するのではなく、学部教務委員会と密接に連携し、大学のFD担当機関（授業評価改善推進部会）に依存することなく独自にFDに取り組んでいるといえよう。

具体例としては、ここ3年にわたり「私の授業改善と工夫」という冊子（紙媒体による場合もあれば、予算上の問題から電子媒体による場合もある）が作成され、全教員が報告することを義務づけられている。実際に24年度と25年度の大学院における「私の授業改善と工夫」で筆者が書いたものを以下に掲載する。

24年度の大学院における「私の授業改善と工夫」

「Q1. 今年度の授業開始前に、「最も工夫しようと考えたこと」について、ご記入ください。

※今年度担当された授業のうち、1つの授業を取り上げて記入していただいても、今年度担当された全ての授業に共通することを取り上げて記入していただいても結構です。」

栄谷キャンパスだけでなく、岸和田サテライトでも大学院の講義を実施した。ここ数年の傾向として、以前に（大学生当時に）民法を全く履修することなしに、大学院の科目を履修する受講生が過半数であることに対応しなければならないことが最大の問題であり、工夫すべきことであると考えていた。栄谷キャンパスの科目では外国人留学生が受講し、岸和田サテライトでは科目等履修生が受講し、両者とも学部レベルの民法の知識を欠如しているケースが大半である。一方で、学部の時に民法はもちろんのこと、その他の多くの法律科目を受講した民法専攻の受講生も存在し、学力差が極めて顕著な状況が存在し、今後も当分は続くものと予測される。従って、ある程度のリーガルマインドができている受講生がレベルアップし、初学者でも理解できる材料を見つけるように苦心した。具体的には民法を扱った法廷小説や純文学を事前に読ませておき、それを映画やドラマにされたものを視聴させ、文字化されている内容が、どのように映像化されているかを見極めさせることにより、法的思考に馴染ませるように工夫した。

「Q2. 実際に授業が終了して、Q1で記入いただいた授業開始前に工夫しようと思っておられたことが、どの程度実現できたと思われますか。授業中の学生の反応、授業参観および授業参観コメントシート等の情報をもとに、ご記入ください。」

従前は、抽象的・専門的で、難解かつアクセスしにくいという感覚を持っていた民法が、意外に興味

深いものであるということを理解することができたという感想が、毎回の講義の最後に実施しているミニツッパーパーで散見した。また、定年退職した受講生も相当数受講してくれており、講義後も居残って、親しく話しかけてきてくれることも度々あった。それから判断して、民法は難解で近寄りがたい存在から、身近で日常生活を送る上で非常に重要な存在へと変えることに成功したのではないかと思います。ただ、民法に関する十分な知識を持っている民法専攻の受講生にとっては、やや物足りない内容であることは否めず、そこは専門研究で補足すべきであり、致し方のないことであると考えている。

「Q3. Q2を受けて、来年度の授業で『最も取り組むべき課題』について、ご記入ください。」

平成25年度は、栄谷キャンパス、岸和田サテライト、南紀熊野サテライトの3か所で、別々の科目を開講する予定であり、前2か所の受講生は重複する可能性があるが、南紀熊野サテライトは全く異なる受講生で、数年前に3名の教員で担当した「現代社会と法」は、全員社会人学生であり、来年度でも平均年齢は極めて高いと予想している。法律の専門的知識はないが、実社会における法的体験は、通常の大学院生に比較して、はるかに豊富であると推測できる。おそらく、離婚や遺産相続に関して、興味や実体験を持っており、かなり突っ込んだ質問をしてくる可能性もある。他の受講生には興味がない個人的問題を出してくる可能性もあり、その対処をどうするか、準備しておく必要があると思われる。

25年度の大学院における「私の授業改善と工夫」

「Q1. シラバスで明示した到達目標に受講生を到達させるために、工夫した内容をご記入ください。※今年度担当された授業のうち、1つの授業を取り上げて記入していただいても、今年度担当された全ての授業に共通することを取り上げて記入していただいても結構です。」

岸和田サテライトで開講した「現代社会と民法」に関して、学部当時に法律を学んだことのない科目等履修生が約半数在籍しており、「本講義では、一般に難解とされる民法の基本的な内容を、映画やテレビ番組・ドラマの録画なども利用して、できる限りわかりやすく解説する」と明示した。受講者の大半が有職者であるため、土曜午後の4時間×6回という変則的な講義で、実際には、フジテレビ系列で放送された「リーガル・ハイ」という弁護士が活躍するドラマや映画等の視聴を中心にして、質疑応答をし、最後の30分程度でレポートを書いてもらうという形式を採用した。初学者が大半を占める中、法学部出身で法律関連の実務経験も有するという学生も存在し、学力差が極めて顕著であった。ただ、1回あたりの講義時間が長いので、90分授業では使用できないドラマや映画を上映することができ、CMやストーリー展開に関係の無い部分をカットさえすれば、テンポが速く、内容も充実した具体的に理解しやすく興味深い教材となったように思われた。

「Q2. 実際に授業が終了して、Q1で記入いただいた工夫がどの程度実現できたと思われますか。授業中の学生の反応、授業参観および授業参観コメントシート等の情報をもとに、ご記入ください。」

土曜・午後、岸和田サテライトでの開講であるため、他の教員の参観はなく、授業参観コメントシートもなかった。しかし、講義の最後のレポートで、受講生の感想を十分に知ることができた。視聴させたドラマや映画をほとんどの受講生は見たことがなく、見たことのある少数の受講生も講義で見て、質疑応答をすることにより非常に新鮮かつ興味深く、改めて法律、とりわけ民法の重要性を感じたと記入してくれていた。栄谷キャンパスでの受講生に比較して平均年齢が高く、有職者が多く、実務上の契約や、私生活上の婚姻・離婚・遺産分割・遺言による指定相続など、社会経験も豊富なため、法律の有用性が理解しやすいことと推測できる。

「Q3. Q2を受けて、来年度の授業で『最も取り組むべき課題』について、ご記入ください。」

Q2を受けての課題は、特に存在しない。というのは、来年度、岸和田サテライトや南紀熊野サテライトの講義がなく、栄谷での「民事責任法特殊問題」だけで、受講者の大半は通常の大学院生となると推測している。従って、法学において非常に重要な社会経験が乏しく、経済や経営の知識はあっても、法律専攻の学生を除けば、法律の知識が欠如しているのではないかとされる。さらに、修士課程の2年生は、7割強が外国人留学生で、日本語能力に問題のある場合も考えられる。ただ、大半が中国人留学生で、紙媒体での資料を多用すれば、理解度は高まるのではないかと考えられる。問題は口頭での質疑応答であり、受講生次第と考えている。

2 学生による授業評価以外のFD活動

筆者は、平成10年3月から取り組んだFD活動を通して、授業改善の具体的活動としては、学生による授業評価よりも公開授業とその検討会ならびに授業参観プロジェクトなどが有効であると考え。すなわち、FDといえば学生による授業評価を実施することであると思われる。しかし、FDという傾向もあったが、ここ数年では公開授業実施に踏み切る大学が多く、授業改善に対する効果が強く認識されるようになってきている。すなわち、従来はFDといえば学生による授業評価のことだけを指す時期があったと言っても過言ではなかったのに、最近はFDへの取り組み方が少しずつ変容してきていると思われる。また、大学の外部評価（第三者評価）においては必ずといってよいほど学生による授業評価を実施することが要求されるが、それだけでは、もはや十分ではなくなっている。

ところで、果たして学生による授業評価は一般に期待されているほど授業改善に有効なのであろうか。もし、毎回、実施できれば授業の振り返りに非常に有意義であると思う。また、全く授業改善に取り組まない教員に対する威嚇の効果（尻叩き効果）は存在すると思われる。しかしながら、率直に言って、1年か半年に1度の学生による授業評価が授業改善にどれほどの効果があるのか、極めて疑問であると言わざるを得ない。すなわち、学生による授業評価は、その多くが半期に1度だけ、それも大抵は学期末に実施し、一定時間経過後、その結果が返送

されるのが通常であり、フィードバックしても当該授業を受けてアンケートをしてくれた受講生に対する反射的効果が実質的に得られない。

それに対して、公開授業を実施し、その直後に検討会を開催すれば、授業改善の即効性は、はるかに大きい。公開授業&検討会は他の教員に講義を参観してもらい、当該講義終了直後に検討会を開催して意見交換するものであるが、時間と労力の問題を除けば、当該講義の振り返りにとって極めて有益であり、参観教員にとっても他の教員の授業テクニックを盗み取る絶好の機会でもある。少なくとも和歌山大学における10年以上のFD活動を通して自分なりに下した結論である。ただし、残念ながら、その労力や時間的諸事情のために、参加者が全く増えないという点に問題がある。この弊害に対処すべく考え出したのが授業参観プロジェクトである。

平成10年度からほぼ毎年作成された和歌山大学FD報告書で述べたように、単発的に教職員が授業を参観して、その終了直後に検討会を実施する取り組みを公開授業&検討会と定義し、他方、講義者以外の教員または学生が継続的に授業を参観し、講義者が運営するホームページ上の掲示板と電子メールとで授業に対する意見や感想の遣り取りをする取り組みを授業参観プロジェクトと定義する。そして、授業改善を図るにあたり、上述したように、公開授業&検討会は極めて効果的であるが、具体的な運用面・実行に当たっての難易度等を考慮すれば、授業改善に取り組むに当たって学生参加型の授業参観プロジェクトがもたらす効果ならびに有益性は公開授業&検討会に勝るとも劣らないものであると考える。

というのは、受講生の中に当該授業に取り組む意欲の非常に強い学生がいる場合、その学生の意見を聴くことも授業改善に非常に有効であるといえるからである。毎回当該授業を熱心に聴講している学生の場合には、単発的にしか受講できない大学教員よりも当該授業に対する観察力は鋭いと言えるかもしれないのであって、FD・授業改善を進めていくためには、教員側の改善に関する努力・工夫と、受け手である学生側の改善に関する関心、意欲の調達、態度の向上という双方からのアプローチが必要かつ不可欠である。

大学院の法学系科目で実施した授業参観プロジェクトは、1回だけ講義を参観した教員による授業への参加・観察という教員参加型授業参観プロジェクトではなく、毎回受講している学生による学生参加型授業参観プロジェクトを想定しているのであって、毎回受講してくれている学生からメールで感想をもらう形式で試行した。もし可能であれば既に当該科目を修得した学生であることが望ましいのであるが、実際には不可能であった。すなわち、未修得の学生で、受講登録をして当該科目の単位を取得したい場合、講義者の歓心を得ようとして、授業に対する意見や感想が迎合的になる可能性が高くなるのであって、それでは本来の目的である授業改善につながらず、既修得者であれば率直に意見や感想を述べられるのであるが、修士論文作成に多忙な大学院生にそれを望むのは不可能であったからである。

ところで、学生参加型授業参観プロジェクトは、継続的に当該科目を受けている学生が毎授

業後、メールにて意見や感想を率直に言ってくれる点にその特色があり、公開授業とその検討会では、毎回、他の教員が参加することはスケジュール的に非常に困難であって、その難点を克服するものが学生参加型授業参観プロジェクトである。なお、平成11年度より開始した公開授業&検討会の実施に伴う困難は、和歌山大学FD報告書やUD報告書ならびに和歌山大学「大学特別経費」研究報告書の『公開授業と授業改善』などに掲載した。

また、学生参加型授業参観プロジェクトは、最近流行の学生参画型FDの一つと考えられるし、平成17年度の大学教育学会のラウンドテーブルで報告し、岡山大学その他の大学教員より多くの示唆を得られたことであるが、その意義として次のようなことを上げることができる。

第一に、学ぶ側の意欲向上が教える側にも変化を及ぼす可能性がある。従来のFDにおける常識が「大学教員だけが授業改善に努める」というのに比較し、教員と学生とが一体になって授業改善に取り組む姿は理想的な大学像を目指すものであるといえる。また、授業料を払っている学生、場合によっては保護者に対する説明責任を果たすことにもなりうる。近年高まってきている大学教育の享受者のコスト意識に対する回答の一つであるといえる。

第二に、学生参加による大学教育の改善を図るものであるから、大学としての教育・授業の質的向上につながり、授業参観プロジェクトに参加していない一般学生の学びの充実にまで参与するものでもある。さらには、近年積極性の乏しくなってきた大学生の学びに対する意欲を高めることにも繋がることが期待される。

第三に、学生参加型授業参観プロジェクトは学生参画型教育改善の一部を形成するものであり、学生にすべてを任せてしまうという性格のものではなく、学生と教職員とが一緒になって教育改善・授業改善を議論し推進しようとするものである。負担からすれば、教員だけで検討を進めるよりも労力とエネルギーを必要とするものであり、決して大学の責任回避・責任軽減にはつながらないのではあるが、このことに気づき積極的に取り組むことは高く評価されて然るべきものである。また、時代の流れから考慮しても、学生のニーズを適切に受け止めることは、消費者主権という考え方から当然のことであり、今こそ学生参加・参画型FDを真剣に考えるべきだと思う。

第四に、教員集団だけで教育改善が行き詰まりを見せている現実、大学関係者なら誰でも感じていることであり、今さら、「FDのような教員側の問題に学生が口を挟む必要があるのか、また学生にその能力があるのか」という疑念やFDの理想論、教員の社会的責任論などを振りかざしても全く説得力はないのであって、むしろ、学生の積極性が授業自体を変革することにつながり、ひいては大学教育をより良い方向に導くのだという意識を持つことは極めて重要なことである。大学の構成員全体が深い関心を寄せる形での授業改善は、大学の教育改善をより一層推進しやすい方向へ導いてくれるものである。

以下に、栄谷キャンパスにおいて開講している民事責任法特殊問題の受講大学院生からの意見や感想を掲載する。（掲載順はメールで送付してくれた日時の先後に基づく。）

受講大学院生A

「教材は適度に難しく（後半はかなり難しかったです）、それほど民法に詳しくない私でも理解しやすい内容で助かりました。先生の説明も具体的で（企業名などを用いるのはよかったです）、とても分かりやすかったです。基本的に受講生に説明させ、質問がなければ先生からの質問という形式も、一定の緊張感をもって、授業に臨めました。総じて、選択して良かったと思える授業でした。」

受講大学院生B

「授業は具体的事例を数多く提示して頂き理解が深まりました。債権者代位権による債権回収、根抵当権の消滅請求など実務経験の全く無い私にとっては理解するのに苦労しました。登記もコンピュータ管理され、法の世界も情報化が進展してきており、今後はデータの漏洩や不正使用などが起こらないよう、適正・厳格な運用がますます必要な時代を迎えつつあるのだと感じました。

本来、大学院生ならば先生がおっしゃるように民法のテキストをマスターした上での授業展開ということになるのでしょうか、私にとっては基本を丁寧にご指導して頂いたので、間違っず解釈していた箇所が幾つか発見でき、力となりました。合わせて、私自身のレベルの低さも認識でき、やっと茶帯程度の実力になったのかなと思っています。黒帯程度まで実力を高める努力を続けたいと思っています。

理解を深める意味で放送大学の講座も学習しました。各講座は最初に設例があり、最後の5分のまとめの部分で設例の解答がなされるという展開でした。可能かどうか分かりませんが、事前に次の授業の内容に関する設例を作って頂き、全員で各自の考えを発表すれば、院生自身の事前学習の時間が増え、更に実力が付くのではないかと思います。如何でしょうか。

民法の世界も改正、変更などがあり、日々注視していかないと間違っず理解をしてしまう可能性があるということを感じました。

使用したテキストはコンパクトにまとまっており使用し易かったですが、私自身にとっては図を使った説明がもう少しあれば更に理解が深まったのではと感じました。」

受講大学院生C

「民法を今まで勉強したことがない人や、専攻していない人にとって、基礎的なことを踏まえるのに、ちょうどよい講義であったと思います。ただ、1講義に2人の発表という形式であったため、章によっては少し、あしはやに終わってしまったように感じました。判例を扱えれば、より具体的に理解できたのでは、とも思いますが、時間的に難しいところ。」

受講大学院生D

「この3、4か月ぐらいの間、民事責任特殊問題の授業が受けられて、本当に感謝しています。最初は、吉田先生のところで日本民法特に財産法詳しくわかるようになりたかった、今、わかるようになって、うれしい気持ちがいっぱいです。

私は内気な女の子なので、大学院へ来たはじめは、とても不安で、また自分の日本語に対しても自信を持っていませんでした。しかし、この3、4か月ぐらいの間、日本語で授業を受けてとても役に立ったと思うようになりました。前に比べれば、日本語もすごく上達したのだと思っています。

授業の状況についてですが、まず、先生は真面目で、責任感の強い、いい先生なので、とても人気が

あります。先生は多くの例を挙げてくれたので、いい勉強になったと思います。それをうまく活用することは大切なのだと思います。そしていつも、先生からもっと勉強するようにと言われていています。それから、同窓先輩のみなさんはとても親切です。一緒にこの授業を受けるのをいつも、楽しみにしています。先生、色々教えてくださいまして本当にありがとうございました。

諺のように、『塵も積もれば、山となる』の精神でがんばっていきたいのです。また自分にもっと挑戦したいとも思っています。』

受講大学院生E

「【講義形式】

当講義を受講するに当って、前提となる民法の知識がほとんどありませんでした。テキストを読んで質問という講義形式は基礎から勉強するためには、大変ありがたかったです。また、他の講義でも必要となる知識であったため助かりました。

【テキストの難易度】

基礎的なテキストであると思いますが、どんどん難しくなると感じました。ただ民法を学ぶ院生としては必要最低限の知識であるというのはよく分かりました。

今回、初めて民法を学びましたが、楽しかったです。』

受講大学院生F

「民事責任法特殊問題の授業は、私にとって大変有意義でした。お恥ずかしいのですが、租税法を勉強しているにもかかわらず、民法の基礎知識はほとんど持ち合わせておらず、たぶん学部生よりもおとっていたとおもわれます。租税法を専攻し研究を進める上で、民法の基礎知識が必要となるという認識はあったので、この授業をとらせていただいたのですが、本当によかったとおもっています。

まず、先生もおっしゃっていらしたとおり、テキストは初心者にとっては大変わかりやすく、また実際の例を多分に記載してあるので、理解しやすかったです。専門的に勉強されている方にとっては、少々物足りなかったのかもしれませんが、私にとっては非常にとっつきやすく、助かりました。

また、授業の進め方についても、生徒に重要な論点や難しい論点について質問するという形式をとっていただいたため、たえず授業に参加している感があり、集中することができました。予習が及ばなかった点多々あり、とんちんかんな返答をすることも多かったと思いますので、先生には大変ご迷惑をおかけしたと思います。

また、大学院の授業が大体においてそうですが、生徒自身がその割り振られた章について自ら調べ発表するという授業形態は、生徒がその内容を理解する上で非常に有益であり、また授業に参加するという意識を持つ上においてもとても良いと思います。

今後は、このテキストをベースとして、先生のおっしゃっていた有斐閣Sシリーズのテキストに目をおして、さらに理解を深められたらと考えています。』

受講大学院生G

「民法について4ヶ月程度学習しましたが、正直なところ、毎回の授業内容を完全に消化できたかという疑問が残ります。税理士志望の私にとっては、将来民法の知識が必要となるケースが多々あると思

われますし、だからこそもう少し気持ちを入れて学習をすればよかったと強く思います。

個人的な意見ではありますが、授業内での先生の具体例を交えた解説が非常に分かりやすかったと思います。他の受講生とも話をしましたが、皆そろって同意見でした。すなわちここから考えられることは、先生が初学者向けにテキストを作成され、それをもとに授業を進行していただければより充実した授業になったのではないのでしょうか。大学院の授業でありますし、最低限学部レベルの知識があることが前提だと思われるので、私の意見は横にそれているかもしれませんが、やはり上記のように思うのであります。

民法とは関係ありませんが租税法関連のことで意見があります。もう少し租税法関連の授業を増やしていただければと思います。租税法関連の授業を充実させ、そしてそれを、税理士志望の人たちに広くアピールすれば、より多くの学生を確保できるのではないのでしょうか。」

受講大学院生H

「租税法における女性の所得（内助の功等の評価）について研究するためには、民法に規定する法定夫婦財産制や相続について学びたく、本講義を受講しました。

本講義は、民事責任法に関する判例について、参考文献をまとめ・発表・質問を受けるという報告形式でしたので、当該判例の理解について深めることができました。また、毎回、発表される判例について、必ず質問しなければならず、あるいは先生からの質問にも答えなければならないため、事前学習が必要な講義でした。また他の受講生の報告からの異なった視点から解釈・理解、参考資料の提供があり、自分の課題テーマ以外の判例を通じての民法、民事責任法の法律的問題について、条文解釈、判例の研究方法などについて広く学ぶことができました。租税法との関連については、これから研究していかなければなりませんが、本講義を通して民法の解釈に少し近づいたように思います。」

受講大学院生I

「この授業では、民事訴訟に関わる様々な判例を用いて、問題の所在、事実の概要、判旨、本判決の検討などを考え、発表者が授業を進めていく授業でした。

この授業でよかったのは、他の発表者の判例の発表を通して、人それぞれの私見を知り、毎回の授業を通して、少しずつ民法に関する知識が付いたことです。

自分自身の発表を行って思ったことは、最高裁の判断に賛成ということが多く、自分の私見をなかなか持つことが出来なかった事です。」

受講大学院生J

「民事責任法特殊問題では、各学生が主体となり、事例に基づいて発表を行うという授業形式であった。自身で民法の事例を研究することにより、講義形式の授業より知識が深く残るという特徴があった。また、発表で理解が乏しかった所、又は理解が間違っていたところは教授が、発表後、丁寧に解説、指摘して下さり、非常に勉強になった。さらに、他者の発表を聞くことによって、自身の発表準備や発表の反省点なども鑑みることができた。他者の発表の際には質問事項や自身の理解が正しいか否か等で気が抜けず、緊張感がある場面もあった。一方で、議論では時に教授が身近な例で説明して下さり、楽しくわかりやすい場面もあった。私は税理士志望であるが、この講義を受講し、所得税法などに関連するこ

とが多い民法の知識を深めることができて本当に良かった。」

受講大学院生K

「私自身は、学部生の時も民法の授業を受けたことがなく、また民事責任に関する内容をこれほど深く掘りさげて学習したこともなかったため、比較的少人数で参加することができたこの授業は、大変刺激のある有意義なものとなりました。もともと民法に関する知識も乏しかったため、特に授業の最初の頃は不安な気持ちもありましたが、先生のわかりやすく熱心なご指導により、前期の途中からは、授業を毎週受けるのが楽しみに感じるようになっていました。自ら積極的に授業に参加し、インプットのみの学習ではなく、アウトプットすることの重要性を認識できたことも、私にとっては大変意義のあることでした。また、前期をととして、判例を分析し、自分自身でレジュメを作成し、発表し、仲間や先生と共に議論を重ねることで、以前より論理的な思考力も向上したのではないかと感じています。比較的最近の判例を分析したため、今の時代背景を反映した内容を学ぶことができたのではないかと考えています。自己管理や自己責任が強く求められる現代において、やはり最低限の法律知識を身につけておかなければ自分を守ること大切な人を守ることできないと再認識しました。

今後も、今まで以上に深く掘り下げて、学習を続けていきます。この授業をきっかけにその第一歩を踏み出すことができたこと、私は先生に大変感謝をしています。」

受講大学院生L

「事例研究を行うことについては、最新の判例を用いることで、実務上の法律知識を身につけることもでき、これからの社会経済においての場面でも役に立つことを学べたと思うので、現在の授業内容には、満足しています。また、判例の内容について発表者以外の人に問うことは、受講者全員の知識を深めるので、続けてほしいと思います。

自分のことなのですが、他人の発表について、質問して討論することがあまりできなかったのは残念だったので、これからは、もう少し予習を行って授業に臨もうと思います。」

受講大学院生M

「この授業で初めて法律を学ぶことができ、そして、それにより法と現実世界とのリンクを考えるきっかけを与えてくれた点で、有意義だった。例えば、買物は、民法上の売買契約にあたるが、今までその様な事を意識したことは無かった。そして、それ以上に当事者が権利・義務を負うことも民法を勉強する事で学べた。今後は、中日間で民法を含めた法律にどのような違いがあるか、時間を見つけて勉強し自分の知識を増やしていきたい。」

3 理解しやすい映画やテレビドラマの利用

和歌山大学の本拠地である栄谷キャンパスでは中国人留学生が多く（大学院経済学研究科のここ数年来の新入生の約4分の3に上る）在籍し、栄谷の大学院科目を担当するだけでなく、社会人大学院生が大半を占める岸和田サテライトや南紀熊野サテライトの大学院科目をも担当

してきた。そして、マンガや映画、テレビのドラマ・ドキュメンタリー番組・情報提供番組、文学作品の一コマなどを、受講学生の動機付けや関心・興味を高めるマルチメディアとして利用した。すなわち、栄谷キャンパスにある和歌山大学経済学部講義棟の全教室はプロジェクターを使用できるため、映像や画像を使用して講義できる環境にある。また、著作権法第35条では一定の条件付きではあるが、大学などの教育機関で、公表された著作物の許諾なしでの複製や上映が認められているため、大学や大学院での映画やテレビ番組の上映およびマンガの複製も認められている。そのため、講義で法学教育に関連するテレビドラマや映画、マンガを使用すること自体は問題ない。プロジェクターでテレビドラマや映画を流したり、マンガをスキャンして、スクリーンに映したり、あるいはレジュメにコピーして学生に配布するといったこともできる。以上の前提に基づき、筆者の担当する科目でマルチメディアを利用した講義を展開した。担当する科目で、マンガ・テレビ番組・映画・文学作品といったマルチメディアを利用した講義で理解しやすい内容とする授業改善を行なったつもりである。以下に、受講学生の声の一部を掲載して検証の代わりとしたい。

受講学生N

「私は、授業の教材として映画・ドラマ他により裁判の形式や流れ他が理解しやすいと思いました。外国語を学ぶ為に映画他で見るというのは以前も体験したことがありました。

しかし、法学において映画・ドラマを見て先生が解説して頂くことにより、普段なら流してしまう言葉についても法律専門用語であったりすることが多い。専門書を読んでも理解できない事が多いが映画の最中に一時停止をすることにその場で解説して頂くことにより、印象に残りました。

さらに、ある表現が使われる状況を把握し易いことが挙げられます。話の中で、登場人物がどんな状況でどんな感情を込め、何を伝えたくてその表現を選んだのか。これだけの背景情報と共に手軽に表現を学べる教材として、映画に勝るものはないと思います。

しかし、ひとくちに映画といっても芸術表現としては優れていても、教材としては不適というものが数多あります。その中から、先生が実際に見て教材として活用できる映画の中から理解又は覚える価値のあるものを選んで頂くことにより毎回の授業が楽しく学ぶことができました。

また、英語の授業と法学の授業は同じよう問題があると思います。それは、聞ける、発音できる。でも、言葉の意味がわからない。理解できない。これは、学習の過程では自然な事だと思います。

さらに学習を続けることで、後から遅れて、意味の理解が追いついてきます。しかし、大体その前に学習を止やめてしまうと思います。

毎日、学習を続けると後からよりあの映画の意味や流れが理解できると思います。そうして、イメージを頭とどんどん流し込むと映画やドラマを見れば見るほど、語彙がたくさん増えていくと思います。

そうしたら、より法学が楽しく学べると思います。初学者から上級者まで映画・ドラマを見る事によりイメージが固まり大学の授業の教材としては、有効だと思います。

受講学生O

「小説・ドラマ・傍聴等は法学教育に有意義であるかについての考察」

1. はじめに

平成24年度「現代社会と民事紛争－白い巨塔を中心に－」を受講した。本講義では、白い巨塔のテレビドラマを視聴しての講義が中心とされていた。本講義の受講を踏まえ、小説・ドラマ・傍聴等は法学教育に有意義であるかについて考察する。

2. 法学教育とは何か

小説・ドラマ・傍聴等は法学教育に有意義であるかについて考察するにあたり、そもそも法学教育とは何かについて考える。

法学の専門的教育については、大学ならびに大学院の法学系学部で実施されるものであり、ここでは、法律専門家を育成することとともに、専門家とはならないが一般社会を構成する市民として法学の素養を持った者を育成すること、その目的とされるものと考え。法学系学部では当然法律専門家になる者がいる程度であるが、決して全てが法律専門家になるわけではない。専門家とはならないまでも、法学の素養を必要とする職場の者はもちろんであるが、法学とは関連のあまりない立場となる者でも、法学教育を受けた上で社会を構成する者となることで、それらの素養が社会のためになるものと考え。

私個人は、もちろん法律専門家ではなく、法学系学部出身でもないで、過去には法学教育を受けた者ではないといえる。

ここで考察する法学教育は、専門家となるための教育ではなく、社会を構成する市民が法学の素養を身につけるということを前提とする。

3. 本講義を受講して

本講義は、現代社会と民事紛争のテーマのもと、山崎豊子「白い巨塔」の映像作品を視聴しての講義を中心として行われた。講義の受講にあたり、映像作品は見なかったが、事前に小説を読み終えて、全体のストーリーをある程度把握した。

小説ならびに映像作品は、小説もベストセラーであり、映像作品も高い視聴率を取ったもので、法律の知識がない一般の読者・視聴者としても、とても興味深いもので、大いに引きつけられるものがあった。小説を読むなり、映像作品を見るなりだけでも、なんとなくは裁判とはこんなものなのかという感触を得ることができるのではないだろうか。これを題材として講義を受けるのであれば、それで十分なのであらうと思われる。

しかしながら、法学に関連した講義として、これらを捉えた場合は、自分が裁判に関する知識を有していないことから、小説等に出てくる裁判に関する用語一つについても、厳密には理解できておらず、これらを一つ一つ理解しながら進めていくことを個人として行っていくことは、相当の労力を必要とすると思われる。

実際に、本講義では、各ポイントについて先生の解説を得ることによって、単に小説等として興味深いということから一歩進んで、理解をしていくことができたと考えている。

4. 小説等の有効性について

小説や映像作品としてそれなりレベルにあるものであるものであれば、それらは所謂専門的な知識を有している者だけを対象としたものではないので、それらの知識を有していない者でも、入り込みやすこと

は間違いないと考える。

本講義では、「白い巨塔（映画版、田宮版テレビドラマ、唐沢版テレビドラマ）」の他にも、「それでもボクはやっていない」と「ジャッジⅡ」を視聴したが、いずれの作品も教育用に作成された作品と比べると、見る者を引きつける。これらは、当然ではあるが、一般の人たちを広く対象として、多くの予算をかけ、レベルの高い俳優陣で構成されるものと、特定の教育を受ける者を対象として低予算で製作されるものに、大きな違いがあることは間違いない。

法学についてさして興味の無い者たちを対象にして、少しでも興味を引くように仕向けていくには、これらの小説等を題材として使用することは、効果があるものとする。また、本講義ではこれらの題材について、受講者で議論するということはなかったが、テーマを絞り考察を行う、議論をする等のための題材として活用することにも十分に耐えうるものとなるのではないだろうか。実際の判例等が多くあるので、もちろんそれらを教材とすることが基本なのであるが、小説等を対象とすることで、実判例では思いつかないようなことを考えるということができないのではないだろうか。

しかしながら、大学・大学院の教育としては、このような題材のみで行うということは、決してそのようなことはないであろうが、問題があると思われる。大学というのは、学問をしようという意欲を持った者が集う場であるべきものであり、本来はこのような興味を引くような仕掛けがなくても、しっかりと意欲を持って取り組むべきものではないのであろうか。

また、小説やドラマはいかに良くできた作品であっても、あくまでも小説でありドラマであり、フィクションであることを、十分に認識しておかなければならないと考える。作者は、作品を生み出すために、十分な取材等を繰り返していると思われ、そのことは専門知識がなくとも感じるができるが、小説等は決して事実そのものである必要はなく、これらを題材とするについては、現実にこのような訴訟がなされた場合と異なる点を認識して教育を受けることを要されるであろう。

小説等を題材として教育することを考えた場合、それらをより効果のあるものとするためには、下記のような手順が考えられるのではないだろうか。

- * 法学全般の基礎についての知識教育
- * 代表的は実際の判例に関する教育
- * 教材とする小説等の内容の把握
- * 教材とした事象について、実際の裁判を想定した場合の問題点等の検討
- * 各人による問題点等に関する議論

教育である限り、どういうレベルの者を対象として行うのかで、その効果的な実施要領は異なると思うが、本考察で対象としたものについては、簡単な手順ではあるが効果を大きくすることができるのではないかと考える。

傍聴については、実際に行っていないので、現状に自らの裁判そのものに関する知識は、ほぼ本講義での知識のみであるが、何事においても自らが実際の場所に行って体験することは、多くの新しい発見を伴うものである。教育としては大いに有意義であると考えられる。ただしそれをより有意義なものにするには、事前の学習、どのような観点で傍聴するのかといった、学ぶ者の姿勢が重要であることは言うまでもないことと思う。

5. 最後に

平成24年度「現代社会と民事紛争－白い巨塔を中心に－」を受講し、その結果を踏まえ、小説・ドラマ・

傍聴等は法学教育に有意義であるかについて考察した。

結論としては、初期段階において、受講者の学ぼうとする意欲を高めること、小説等の内容と、実際の裁判を考えたときの納得できる点、異なると思われる点を考えるためには、有意義なものであると考える。

また、傍聴については実体験として有意義であると考ええる。

本講義を受講したことを今後に役立てるために、引き続き知識習得に努めるとともに、機会を見つけて裁判の傍聴をしたいと考えている。」

受講学生P

「民事紛争と現代社会の感想～火車・ナニワ金融道・カバチタレを読んで～

私は、吉田先生推薦の小説火車・漫画ナニワ金融道・カバチタレを読み、民法、とりわけ金の貸し借りや土地抵当権等について学習できました。

ナニワ金融道は、消費者金融会社「帝国金融」の営業マン灰原達之と、その客との借金にまつわる因果深い人間模様を描いた作品でした。客には、風俗営業の許可申請や海事代理士、連帯保証人になった彼氏の借金の肩代わりをしてソープ嬢になる女、先物取引で失敗し交通整理まで落ちた小学校教頭、闇金融業者、更には消費者金融間でのトラブルなど、様々な描写にとっても興味深く読めました。作者である青木雄二氏の拝金主義・共産主義も垣間見える、独特な描写がとても印象的でありました。

ナニワ金融道が民事紛争において法の裏側を駆使しているのに対して、カバチタレは、行政書士事務所を舞台にして、正攻法の法律を駆使して社会的弱者を守っていく物語と感じました。但し、青木雄二監修であるので『ナニワ金融道』と同一の世界観にあることが示唆されていたように思えました。具体的には、主人公田村が交通事故の証拠集めを、先輩柴田をまねて、ゴミから探すなど、全くの正攻法の法律とは言い難く感じました。カバチタレの所長大野が、作中での行政書士の活動が弁護士法第72条に違反する非弁活動という指摘がありました。この点は事件性必要説に立つと非弁行為とはならないとはいえ、今後の行政書士の課題であると深く考えさせられました。

『火車』は犯人が最後まで物語に登場しないままで終わるという、ミステリ的に極めて大胆な手法を使った作品でありました。犯人自体は存在し、最後まで見つからないというわけでも、とうに死んでいて登場できないわけでもないのかかわらず、伝聞や状況描写の間接的な描写のみで、犯人という事件で最も重要な人物を描ききった点にこの作品の価値を見いだせました。

この作品のテーマは、ナニワ金融道とやや似ており、消費者金融や破産などの借金に人生を左右される女の生き様を、彼女のことを追い求める刑事の視点から描かれておりました。この作品はむしろ、女性から支持されるものではないかなと感じました。作中で、調べを進める本間は、都会での1人暮らしの夢からカード破産に陥る女性や、無理なマイホーム購入で離散に陥った一家、実家の借金が原因で追い詰められ、婚家を去らざるを得なかった女性など、借金に翻弄される人生を目の当たりにするのだが、これは決して妄想・空想の話でもなく、民事紛争に巻き込まれないために大変意義深い作品でありました。」

4 裁判の傍聴を利用した法学の授業改善

受講学生に刑事裁判や離婚裁判などを傍聴したり、裁判所や弁護士会などが開催する一般市民向けイベントに参加したりすることを奨励して、動機付けを高め、入学時の低学力を少しでも高めることを計画し、実行した。大学院生のみならず、経済学部学生の有志も参加してくれたので、以下に、大学院生と経済学部生の感想の一部を掲載する。

受講学生Q

「裁判といえば、検察側と弁護側が激しく弁論をしあっている場だ、と思っていました。実際裁判を見ても、検察官も弁護士も、ただ決められたセリフを言うかの如く、たんたんと作業のように弁論をしていました。早口すぎて全く聞き取れなかったほどでした。

証拠証明が始まると、検察側も弁護側も親しげに被告人に話しかけ、被告人が話しやすい環境を作っているように思えました。弁護人は、被告人の体調を気遣ったりする面も見られました。

検察官と弁護人の質問が終わると、最後に裁判長が一步踏み込んだような質問を被告人にしていました。印象的だったのは、「執行猶予中にもかかわらず、再犯を起こしてしまい、本当に更生することができるのか？何を根拠に、更生できると主張するのか？」といった内容の質問です。

今回見た裁判は、被告人が3人いましたが、いずれも、執行猶予中の再犯でした。前の裁判で、大目に見てもらったことできちんと反省できなかったから再犯に及んだと、一人の被告人が言ってましたが、本当にこいつ反省してるのか？といった態度をとる被告人もいました。大きな事件の刑事裁判で、被害者遺族が被告に、ちゃんと反省してほしいと言っているニュースをよく見かけますが、その気持ちがわかった気がします。

最後に、授業で裁判の見学を取り入れるか否かについてですが、是非取り入れるべきだと思います。学生がそれぞれ感じることはいろいろあるかと思いますが、確実に社会勉強になると思います。裁判員制度がいよいよ始まる今日、実際の裁判を見て、罪を裁くというのはどういうものなのかを実感できたのは、よかったと思いました。」

受講学生R

「今回の裁判で共通していることは、被告が皆、前科を持っているということだった。罪を犯すことは法によって裁かれる、通常は裁かれたくないという心が犯罪の抑止力となっているはずなのに犯罪を繰り返してしまうのはなぜなのか。繰り返さなければならないほど切迫しているのか。しかし4つ目の新件を見ているとそうでもないとも思える。ならば単に自分勝手な欲に突き動かされているのか。そうだとするとなぜそれを抑えることができないのか。裁判の傍聴は初めてだったが終わってみると次から次へと疑問が湧いてくる、と同時に興味も湧いてくる結果になった。民事であれ、刑事であれ、犯罪は一人のエゴが多くの人に迷惑をかけ、果ては人生を狂わせるものだと感じた。これからの自分の在り方も考えさせてくれる良い機会になった。

裁判の後に裁判長の話を聞いたことも貴重な体験だった。やはり現実ドラマのような展開でもなければ、ドラマのように心が伝わることも少ない。執行猶予中に再犯が起きるのは裁判長として非常に残

念だろうと感じるに足る裁判内容であったと思う。」

受講学生 S

「私は初めて裁判を傍聴しましたが、見る前の印象は緊張感があるのではないかと思っていました。実際は、緊張感はもちろんありましたが、意外に淡々と進んでいくように感じました。そして裁判長が被告人に対して、きつい言い方をしていたのが印象的でした。私はドラマなどで見た裁判のイメージしかありませんでした。だから、裁判長はもっと優しい言い方をするのではと思っていました。初めての裁判傍聴は頭の中のイメージと随分違う点が多かったです。

一人目の被告人の証人として、その人の母親が出ていました。それを見て、母親が被告人の罪を軽くしようとしているように感じました。庇うような言い方が、聞いていて少し複雑な気持ちになりました。自分の子どもなので、罪を軽くしたい気持ちはわかりますが、だからこそしっかり犯した罪だけ償ってほしいと願うべきではないかと思いました。それに、被告人が罪を犯したのは2回目だったので、ますますそう思いました。しかし、裁判長が母親にも責任があると指摘していたので、責めるのは被告人に対してだけでなく、親族である証人にも言うのだと驚きました。そして裁判長は心理的な面を多く質問していることにも驚きました。

3人の被告人を見て感じたことは、俯いていたり、ソワソワしていたり、言っていることに矛盾があったりしました。そういう行動を見ていて、被告人の発言に対して信じられる気がしませんでした。そして、その発言を聞いていて、被告人の精神年齢が低いようにも感じました。話し方、応え方などからそう感じました。今回傍聴した裁判は裁判員裁判になりませんが、もしもなっていたら、私には被告人に対して更生するだろうという印象は受けることができなかったと思います。

弁護士・検察官について感じたことは次の通りです。弁護士は被告人によって変わっていたので、それぞれの特徴が感じられておもしろかったです。淡々と進めていく人もいれば、検察官に対して指摘を入れるぐらい余裕がある人がいたり、少しおどおどして被告人に対して誘導的な発言になり、反対に指摘されたり、弁護士とは個性がよく出る職業だと感じました。検察官の方はほとんど変わらず同じ方がされていて、冷静に、かつ的確な指摘を被告人にしていく、私のイメージのままの検察官でした。しかし、べらべらとめくる資料の分厚さを見て、ストレスがたまりそうな職業だと思いました。

今回、裁判を傍聴してみて、以上のことを感じました。実際に犯行の手口などを順番に淡々と説明しているところを聞くと、自分とは関係ない事件でもゾッとしました。でも、傍聴してみて興味深く感じる点は多くありましたし、被告人の応え方などを見て、自分の普段の話し方を見直すいい機会にもなりました。また機会があれば是非傍聴したいと思いました。次回傍聴するときは、もう少し民法をちゃんと覚えて聞けるようにしたいです。」

受講学生 T

「法廷に入室した最初は静まり返っており、緊張しました。しかし膨張しているうち意外に法廷というものは身近なものだと感じるようになりました。裁判長が関西弁を使って説得する場面があったり、弁護士は事務的にことを進めるのだと想像していたのですが個性がありました。被告人は様々なケースがありときに同情さえしてしまいました。

簡単に流れをまとめます。

法廷は宣言で開始し、まず本人の氏名生年月日本籍地などを確認するところから始まりました。

そして向かって左の検察官が起訴状を朗読し、事件の内容を説明していました。

裁判長が黙秘権について必ず確認を入れ罪を認めるかどうかそのあと検察官が論理的に罪を提示していました。

その後証人喚問が行われていました。証人は嘘をつかない等の証言を読み上げた後、質問に答えていました。そのあと検察官が再度罪を供述し、厳しい意見を述べます。

最後に弁護士と被告人は言いたいことがあれば述べて判決の日程を告げて閉廷します。

これらは刑事訴訟法という法律に基づいて行われていると後に知りました。

最初の警察官の男性がドメスティックバイオレンスで肋骨を骨折させたという事件でした。浮気をしたことがばれ逆恨みし、夫婦関係や親として、警察としての責任感が欠如しており事件に至ったようです。テレビで聞くような事件で恐ろしかったです。判決が気になりました。2件目は特に法廷を身近に感じた事件でした。飲酒運転で執行猶予中の女性がカラオケ店で飲酒後近くの自宅まで再び飲酒運転をしたのです。過去にも交通事故で前科があるということでした。証人喚問では長男が被告人の様子を述べていました。被告人には訪問を楽しみに待つ祖母もいるそうです。飲酒運転をしないように現在は車を売却し近くの職場へ通勤しているということでした。

ここでは裁判長が追及すると同時に説得のような口調で努力の必要性などを被告人に話していました。この件では認識について考えてしまいました。人は罪を認識していながらも事件を起こしてしまうものなのだと思います。経済学では合理的人間を前提にしますが人は決して合理的ではないのかもしれないと考えてしまいました。こちらの事件は判決が本日だったようですが結果が気になりました。

3件目は高齢の農業をしている男性で、自動車運転の過失でした。40キロから50キロのスピードで赤の交差点に進出し、車を転倒させ怪我を負わせたのです。

ここでは最初の罪を警察官が述べる部分から異議があったようで弁護士と裁判長などが幾度かやり取りを繰り返していました。本人は赤信号ではなく黄色信号だと判断したようです。これは信号の見落とししか見間違いかということのようです。不同意に関しては検察はどうするか対応を求められるようです。また検察の持っている文章と弁護士との打ち合わせの部分が違ったらしく弁護士と被告人の間でも何度もやり取りが繰り返されていました。被告人は反省の意を述べる場面で『人間なので絶対とはいえないが?……』というような発言が多かったです。

この件で特に感じたのが整合性という言葉です。

被告人は質問に答えていくのですがその細かいところの整合性がなければそこを突いていきました。それを見ていて法廷というのは論理の世界なのだと思います。1つ1つの発言が重く、つじつまや断定や推定などの言葉の使い方も関係してくるようでした。裁判長も質問が論理にきっちりそっていて、一見何のために聞いたかわからないような質問もきちんとつながっている的確で本当にすごいと思いました。それと事件に関し、老人でも便利な半面車というのは恐ろしいと思いました。高齢者社会がさらに進むに従ってこのような事件はさらに増えるのだらうと予測できました。それを防止するには道路や信号などのインフラやシステムの改善を始めさまざまな部分に変化せねばならないのではないかと思います。

この事件は時間になったので次回ということでした。

最後に溝蓋の窃盗の事件です。グループで窃盗した溝蓋を運搬し保管する場所やトラックの貸出、助

言を行っていたそうです。

お金に困っていたわけではないと言っていました。証人喚問では妻が発言をし、監督の役割について裁判長から指導をうけていました。保釈金も妻の実家から工面したようです。これを聞いて保釈金という制度についてもっと知りたくなりました。調べたところ保釈金とは被疑者が逃走しないための保証金のことだそうです。他の件でも国選弁護士とその費用について述べていて裁判で訴えられるほうもだいぶお金がかかるのだと知りました。

以上今回の傍聴では学ぶことが多かったです。遵法精神は他人に迷惑をかけないためにも大事だと改めて思いました。またこれまであまり気にとめていなかった裁判員制度についても考えざるを得ませんでした。実際自分が選ばれたとしても論理より感情的になってしまいそうです。

また裁判員制度では裁判後に非公開の元で評議がされるそうで本当に公平なのか少し疑問に思いました。」

受講学生U

「今回人生で初めて裁判を傍聴しに行き、傍聴をすることで心が正され、大変刺激を受けることができ良かったです。絶対に法律を守って生きていこうと思いました。裁判傍聴を学校教育の中に入れると犯罪も少なくなるのではないのでしょうか。

門をくぐった時から重々しい空気が感じられ、大変緊張した中始まりました。傍聴者は学生の他はほとんどいないなか、3つの裁判が始まり休憩する間もなく終わりました。裁判は淡々と始められ、最後は少し情熱的に終わりました。

最も驚いたことは、裁判官さんがとても感情的であったことです。『もう二度と同じ過ちを繰り返さないように』という思いが被告人の心にも響いたのではないかと思います。

1番目の裁判は裁判官が判決をいい下した後、被告人の思いを代弁し、二度と繰り返さないよう、刑務所から出た後からが罪を償うときだということを訴えていました。まさにその通りであると感じました。刑を受けることが罪を償うことではない、その後の行動こそが本当の償いであると思います。ということは、終身刑などはその人が償いをその人の行動によっては償えないということなのだろうかとも考えました。この刑罰は出所した後も危険を及ぼす可能性が高い、更正する見込みがない者がうける刑罰ということになるのだろうか。もう少し刑罰について考えてみたいと感じました。

2番目の裁判は出向猶予期間中に再び飲酒運転をしたという被告人の判決で刑務所に入る期間をどれほどにするかを問う裁判でした。検察官による事件の概要が述べられた後、証人（被告人の息子）の発言が始まり、黙秘権があることを裁判官が伝えた後、嘘をつかないという宣誓証を読みました。その後被告人側の弁護士が証人に『これでは被告人が刑務所に入ると困る。被告人も反省している。』という結論へと至るための質問を、普段の被告人のお酒事情、仕事、祖母（被告人の母親）やおじ（被告人の兄）の介護についてしました。弁護士と検察官は私が「そこまで聞くのか？」と驚くほどこと細かに、いつお酒を飲んだのか、どのような意思があって飲んだのかを大変詳しく聞き、その事実に従って『これは民法～条の～に違法する』などと判定を言い合い、法律のかけ合い合戦が始まったようで、とても興奮しました。そして裁判官による被告人への問いかけが始まりました。裁判官は心情の話を良くし、『被告人と証人である息子の飲酒に対する認識の違いはなぜ生まれたのか』『家族の為に頑張っている被告人が、家族の首を絞めてどうするのか』『本当に反省しているのか』というような内容について被

告人に伝わるようになるのか、被告人との距離を縮めるためなのか、特に理由はないのか、徐々にいつもの話し言葉のようになって訴えていました。被告人は反省からか、涙をながしていました。判決は来月に言い渡されるのですが、裁判官の話をおそらく検察官が妥当だとする期間になるのではないだろうかと思います。私もそれに同感です。

3番目の裁判は、2, 3度にわたる信号無視による（人身）事故をくりかえした被告人の刑罰を求めるものでした。被告人がお年寄りということもあるのか、被告人の意見がはっきりしていない上、反省の色も感じ取りにくかったです。証人である被告人の妻は裁判官から『誰が一番つらいのですか。』という問いに対し、『本人（被告人）だと思います。』と発言したり、これからは事情によっては被告人は運転を続けると発言したりと、被害者のことを考えていないのではないかという厳しい意見を投げられていた。もう一度家族で事の事態を話し合うべきであると私も感じました。

この3つの裁判を傍聴し、法律は心（意識）を問い正すために使われているものであるのだという印象を受けました。私の裁判のイメージとは法律をつかい、とても淡々とした感情のないものであるというイメージから逆転し、とても人間味の溢れた、その人の更正のため、世の中のためだけにあるのだというイメージにかわりました。

このような機会を頂き、本当にありがとうございました。また別の裁判官では裁判の雰囲気は全く違うのだらうと思います。また誰かを誘い、傍聴をしに行きたいと思います。』

受講学生V

「私にとって初めての裁判見学で、興味本位の軽い気持ちで行ったのですが、まず入ったときのインパクトが鮮烈でした。テレビのスケッチでみたあの光景が目の前にあるという感動よりも先に、部屋の中と外の空気の違いに、大げさでなく圧倒されそうになったのです。ピンと張り詰めた空気とは、まさしくこのことだなと思いました。そしてなによりも驚いたのは、傍聴席と調停？の距離が近いことについてでした。そこを仕切っているのは簡単に跨いでしまえるような柵一つで、傍聴席の最前列ともなると、もうほんの数センチしか離れていません。その最前列には被告や被害者の親族、証人の方などが普通に座っているのですから尚驚きました。先生から事前に、そういうこともあるから後ろの方に座った方が無難であるとは聞いていたものの、こんなにも見分けがつかないものかとキョトンとしてしまいました。

次に、とても印象に残っているのは、（抽象的な言い方になりますが）裁判長の凄さについてです。これも事前に、今回の裁判長は以前に娘に売春を強要させていた母親に対し、『あんた、それでも人間か！』と言ったりする、裁判長にはめずらしくエキサイティングな人であると先生に教えていただいておりましたので、大変興味をもって傍聴しました。そこには見るからに聡明そうな裁判長の姿がありました。朝から何度も繰り返される裁判に疲労もたまっているでしょうが、裁判長はそれでも辛抱強く被告人の話に耳を傾け、ときに頷き、ときには論理的な指摘をし、またときには感情的な言い方を交えながら、鋭く被告に語りかけます。その語り方は独特で、心にくるものでした。しかし、裁判長がどんなことを言おうと、もう犯罪は起きてしまったことなので何も変わりません。力強いはずの裁判長の言葉がむなしく響いているような気がしました。もし彼ら（被告）が犯罪を犯してしまう前にこの裁判長と向き合う機会を持ち得たなら、間違いなく結果は変わっていたのだらうという期待を抱かせてくれるような裁判長でした。

今回の裁判傍聴は、新しい発見が多く、自分にとって大変有益な時間であったのは間違いありません。このような機会を作っていただきありがとうございました。自分は絶対に被告にならないようにしっかりと生きていかなければならないと、切実に思いました。また今後機会があれば傍聴してみたいです。」

受講学生W

「自分が見た裁判は、自宅への放火の刑事裁判でした。内容は、借金をしていてそれが厳格な父に見つかりそうになったため、自然な方法で借金の明細票を消そうと思い、自宅へ放火したというものでした。

最初に弁護士質問があり、放火をする原因を被告人の小学校時代まで遡って、どういう出来事があり、父にどういう思いを抱いていたかということから、事件の時に何を思って、何を参考にしたかという詳細な話と、事件後の行動について、どこで、金を手に入れたかなどを、やさしく質問をしていくという感じでした。弁護士ということから、きつい質問もなく、被告人もすらすらと答えており、今は父との関係も改善されて更生しているという話が主に話され、被告人家族に対し同情させる感情を抱くようなやりとりでした。

弁護士質問が終わると10分間の休憩があり、被告人は弁護人に何かアドバイスをもらっているような感じで、検察官は法廷から出て行き時間ぎりぎりに戻っていたので、両者とも打ち合わせをしているようでした。

休憩が終わると、次に検察質問があり、さっきの弁護士質問とは雰囲気が変わり、質問内容も、供述と行動の矛盾点や両親への殺意があったのかなどを厳しく追求していました。被告人は、検察官の質問に対し、言葉がつまったり、声が小さくなったりということがたまにありました。さきほどの弁護士質問を聞いただけでは、殺意ということはまったく感じられなかったのに、検察官からの質問でその信憑性がとても増したと感じました。

また休憩をはさみ、裁判官、裁判員質問があり、次々に質問していき、自分が感じたように、裁判員の質問は、被告人への同情と怪しさの両方があるのか、厳しくもやさしくもなく中立的な質問でした。

裁判官、裁判員質問が終わると、昼休憩ということでいったん終了し、自分は午後大学で講義があるのでここで帰りました。

初めて刑事裁判及び、裁判員裁判を傍聴し、裁判の雰囲気や弁護士と検察官の追及など、色々なことを感じました。また、自分は、裁判員制度は一般人が判決に参加するので、顔を見せないものだと思っていましたが、裁判官の隣に座り、被告人に面と向かって質問していたので非常に驚きました。この裁判を見たことで、もし自分が裁判員に選ばれた時にとても参考になると思いました。」

受講学生X

「1 事件の概要

2009年7月10日、和歌山県在住のAさんは、同日の夜に自宅に火を放ったとして、刑法108条違反などにより起訴されたものである。なお火災による被害は少なく、負傷者もいなかった模様。

2 感想

今回の放火は被害も少なく、負傷者も出ませんでしたが、そもそも放火という犯行自体とても重たい犯罪（死刑、無期若しくは5年以上の懲役）で、被告人に反省の態度があるか、また犯行時、被告に殺意がなかったのが争点であると思います。

特に、後者は量刑を判断する上でとても重要であると思います。被告はこの犯行は、大阪の放火事件を参考にしたと供述していますが、その放火事件では死者が出ています。つまりこの事件を参考にしたのなら、死者が出てもおかしくないのです。また、借金の利用明細を自然に処分するために放火したという、供述も疑いなく信じ切れるとは言い難いと感じました。

ただ、被告は現在、両親とも接する時間も増え、父親との関係も徐々に回復する傾向にあると思います。社会復帰に対しても積極的にハローワークに通うなど意欲的であるとも感じとれるため、被告の供述が本心から述べていると判断されれば、再犯の可能性は低いと判断されるのではないのでしょうか。

今回、裁判を傍聴してみて、人が人を裁くという現場を目の前で見ることができた。そして法律というものがどういうものであるかをとても考えさせられることとなった。

人間は不完全な生き物であるから、それが作ったものもまた、完全であるとは言い切れないです。つまり法律も完全ではないのだが、より完全に近づこうと幾度となく改正されたり、増加したりしているのだと思います。特に刑法は六法の中でも特に強行性の強い法律であるが、その刑法に触れることによって、法律と呼ばれるものは、全てどんな根拠、そして経緯を持って制定されたのかとても調べてみたいと思いました。

判決は懲役2年6カ月の実刑判決で、今回は、半日しか傍聴することができなかったのも、直接判決を見たわけではありませんが、友人の話によると、『犯行は極めて計画的で、被告がこのまま子どものことをちゃんと見ていない親のもとで公正するのは不可能と判断』とのこと。被告の親は証言台で『うちの息子はこんなことする子ではないです』と証言していたようで、これが子どものことをちゃんと見ていないにつながったようです。確かにこの親の証言をもとにすればこの判決は納得がいきます。この親の証言を聞いていなかったのも、最初は執行猶予もつくかなと思いましたが、この証言を聞いて実刑も仕方ないと思いました。

人はそれぞれ価値観が違うが、少しでも理解して、より良い判決を下したいという、裁判官と裁判員の意志といえるべきものがとても感じ取れることができました。裁判中はとても重たく厳肅な空気が流れていましたが、それは被告は自分のしたことの重さ、そして裁く側は人を裁く重さをそれぞれ実感しているため、そのような空気が構築されているのだと感じました。

今回の傍聴経験はとても貴重な経験となりました。機会があればまた足を運んでみたいと思います。」

受講学生Y

「1つめは、交通事故の裁判でした。普通車と原動付自転車の見通しの悪い交差点での衝突事故です。被告人は普通車を運転していた人でした。裁判では、事故車や証言から細かい数字の時間や速度を導き出して、私は、そんなに細かい計算もするのかと驚きました。被告人は免許取消の状態でも無免許で運転していたそうです。そして、一時停止場所では一時停止をせずに減速しただけでした。原動付自転車に乗っていた被害者の証言では、急発進してきたとなっていました。急発進はしていないと判断されました。結果、有罪で懲役1年6か月、執行猶予5年でした。

2つめは覚せい剤の裁判でした。被告人は服役したにも関わらず、また罪を犯し捕まりました。前科があることと、覚せい剤所持などの事実をふまえた上で、有罪とされ、懲役3年6か月と判決されました。そして有罪であることから、裁判官は『控訴は14日以内にならできる』と被告人に告げていました。

3つめは窃盗・無免許・覚せい剤という3つの罪が重なっているものでした。この被告人も服役した

がまた罪を犯して捕まっていました。前科7犯で、服役後わずか1年8か月で犯罪を犯しました。覚せい剤を運ぶために、トラックを盗み、無免許で運転したそうです。もちろん有罪となり、懲役4年実刑と判決を下されました。そしてこの場合も14日以内なら控訴できると言われていました。

私は、裁判というものは判決を下して終わりだと思っていました。しかし今回傍聴してみて、それだけではないことに気付きました。裁判官が、判決を下し終わった後に一人一人に話しかけるのです。『あなたを待っている人もいるのだから、しっかり反省して、新たにやり直さない。』私はこの言葉がすごく胸に響きました。傍聴人の私ですら、心にくるのですから、被告人はもっと心にずしっときているはずです。自分のしたことから目をそらさずに、しっかりと反省してもらいたいです。

4つめは詐欺についての裁判でした。内容は通帳詐欺でした。振り込み詐欺に使われる通帳を、銀行からだましとるといったものです。前半は一人目の証言者が出てきました。被告人から勧められて、通帳売買を行ったそうです。この証言者は検察官から様々な質問をされていました。被告人を通じて知り合った人や、詳しい日にち、被告人との関係など、事実を知るために多くの質問を投げかけていました。弁護人もまた、覚えている根拠はどこにあるのかなどの細かい部分をついていました。

この証人は今執行猶予中だそうです。休憩をはさんでから、二人目の証人が出てきました。被告人とは刑務所の中で知り合ったそうです。前半と同じように、検察官や弁護人からたくさんの質問を投げかけられていました。検察官と弁護人からの質問が何もなくなってから裁判は終了しました。4つめの詐欺についての裁判はまだ続くようです。

裁判は何回も繰り返されて判決が出ることを改めて実感しました。

ニュースなどで見たことはあるけれど、実際に傍聴をしたのは初めてです。テレビで見るのとは全く違った感覚におそわれました。今回見た裁判の傍聴はずっと私の頭の中に残っていると思います。裁判の傍聴はいい経験になりました。犯罪を犯したら、周りの人を悲しませるということに改めて気付かされました。」

受講学生Z

「内容に入る前に、地方裁判所に入りそこの職員の案内の方がすぐに声をかけてくれ、どんな裁判が見たいのですか。など、丁寧に案内してくれたことが非常に印象的であった。学生であるとみられていたために、若者が裁判所に来て学習見学しに来ることを歓迎していたようにも思えた。今回、自分が傍聴した法廷にいた傍聴人の分類として、自分と同じような学習見学に来ていた学生数名と、被疑者や証人など身内関連と思われる人たちが8割近く、それと暇つぶしに来てそうなおじいさんや中年の人たちであった。こういった傍聴人の割合からも、若者や学生の裁判所に対する興味関心をひきたいという思いから我々は少し歓迎されていたのかもしれない。やはり地方裁判所という理由もあるかもしれないが、少しさびしい雰囲気は感じられた。賑やかであるべきというわけではないが、多くの一般市民に関心を持ってほしい場所であってほしいというのが率直な感想だ。もちろん振り込み詐欺の容疑者を直に見ること自体初めてだったので、刺激的だったこともあるが、非常にただの野次馬的な好奇心だけではなく面白さを体験したと思っている。これは、法律への更なる興味関心に結びついたという点での知的好奇心のようなものである。やはり、法律によって裁かれようとしていく人たちやこれから裁こうとしている人たちの厳格な様子を直に見たことで、法律の大きさや重さを実感できたからであると考えている。まだ学生であるからということもあるかもしれないが、民法であってもどうも身近に感じられない法律を心

から重みを感じられたのは初めてであった。そういった点からも、法律を専門として勉強する人はもちろんだと思うが、経済学部学生や、その他の法律を考えずに過ごしている若い人には一度実感してほしい経験であると率直に感じた。これから大人になり世知辛い社会では法律は付きまとうものでもあると思うので、そういった点からみれば、現実的な世界を痛感させられたとも言えるかもしれない。さまざまなものを感じられた一日であったので大変よかったと思っている。

ここから公判の内容に入りたいと思うが、3つの公判を傍聴したのだが、種類は二種類で、交通法違反の部類と、振り込み詐欺に関する公判であった。この二つそれぞれの自分のみえた観点からの違いをもとに考えられた特徴や考察を述べていきたいと思う。

まず、検察側や弁護側の様子が、交通法違反の公判に比べて一層厳格な雰囲気を漂わせていた。交通違反に関する公判はどちらかというと説教じみていた。おそらく、違反者はもう一度違反を起こすというセオリーがあるからであると考え。そういったものがあるので、刑罰がそこまで重く感じさせない免許取り消しに加えて、その場を本気で厳格な場にしようという努力の表れであったのだろうと感じた。特に裁判官の人の説教を中心に検察官はもちろん弁護人側もそういった姿勢であったことは印象的である。それでも素人の自分からみても被告人が反省しているように見えなかったのは非常に残念な点であった。

次に、厳格な様子の違いを強く感じさせていた点として、弁護人が本当に被疑者の刑をできるだけ軽くしようとする役割であった点である。もちろん逆も言えることで、検察側も本気であった。交通法に関する公判が適当であったとは言わないが、その点はまったく違っていた。当たり前のことかもしれないが、そういったところを感じさせたのは、検察官も弁護人も頻繁に『撤回します。』という言葉を使用していたことにある。そこから、一つ一つの言葉を慎重に選んで発言されているんだろうなと思った。言葉じりで大きく印象も変わってくるからなのだろうか。そういう観点から、特に弁護人が無理やり証人に対して言わせようとしているところが戦略的なものを感じさせた。これが検察側と弁護側のバランスとして大切なものなのだと実感できた。

最後にまた違った見解だが、弁護人と検察官はすごくわかりやすい違いを感じられた。それはただの印象的なものなのだが、検察官は、どの人もキリっとしていて、凛々しさを感じさせる人たちばかりだった一方で、弁護士の人たちは非常に特有の雰囲気を漂わせていた。これは、役割や業務上接する人の違いであると考えた。役割の点では、やはり弁護する役割とそれに反する役割とでは、性格にも影響してくるのだろうと考えたからだ。また接する人というのは、どうも弁護士事務所へかけこむ人は、一般人（一般人という定義はあいまいだが、）には中々ない経験をしてきた人が行くのだろうと考えた。そこから弁護士を取り巻く環境の特徴から、彼らの人格にも影響するという、至極私的な見解ではあるが、非常に印象的な点であったので少し考えてみた。

以上が自分の見た見解から考えられる感想や考察である。初めにも述べたように、非常に面白い経験ができた。これからも友人でもつれてたまには裁判所にも行ってみたいと思うようになった。」

受講学生・甲

「私は8つの裁判について傍聴しました。そのうち三つは判決であったので、残り五つの事件について概要と感想をまとめて行きます。すべて101号と102号の法廷で扱われた刑事事件です。

①タクシー運転手による自動車運転過失傷害

（概要）

タクシーで客待ちをしている際に、後ろの車を通り越してバックしているときに、後ろの車を通り越したところで被害者の男性に衝突し、怪我を負わせてしまった。

（感想）

検察の質問の際に、被害者は事件による怪我で記憶力が、低下し仕事を辞めざるを得なくなったこと。今まで家族を引っ張っていた被害者がそのような状態になり、娘が精神的に不安定になり家族がバラバラになったことを聞いて大変いたたまれない気持ちになった。確かに被告人はもう同じことを繰り返さないよう気をつけていくだろうが、被害者のそのような状況をそこまで理解していないような感じであった。裁判長が被告人に、今までの行動について、タクシー会社社長も含めて向き合うことと言っており、そのための期間として判決までは、少し期間を設けることになった。この期間に被告人がどのような行動をするか。大変違う意味で判決が気になる事件であった。

②自動車整備業者による道路交通法違反

（概要）

シートベルトをせずに運転していたところを警察に見つかり、取調べを受けたところ、無免許であったことが判明した。お腹が空き何か買いに行きたかったが、右足が痛くて自転車に乗れず、仕方なく車に乗ってしまったとのこと。

（感想）

当日被告人が乗ったのは仕事で代車として使用する車であるが、被害者は自身が住んでいる団地の駐車場に止めていたそうである。これでは今まで何回も乗っていたのではないかと疑われて当然である。また検察庁では今まで数回乗っていたと答えているが今法廷では、はじめは一回と答えその後二回ぐらいと答えるなど供述の食い違いが見られることから反省の色があまり見られない。96歳の母の世話を無免許運転の言い訳にしているが、母の世話は姉の存在だけで事足りることは間違いなさそうである。被害者は過去に交通関係で前科があり、二回の免許停になっているため交通ルールの軽視は甚だしいと思う本当に大きな事故につながらなくて良かった。

③無職による道路交通法違反

（概要）

パチンコを打った後知人とお酒を飲みに行った被告人は二件目に行く際、飲み代を出してもらったことから、自分が運転するといってお酒したにもかかわらず運転した。その間に警察に見つかり飲酒運転が判明した。

（感想）

以前にも同じことをしているという。お酒を飲んで気が大きくなっていたことは大いに関係あるのだろうが、はしごをするためにほんのわずかな距離であるにもかかわらず飲酒運転をしてしまったということが、前にも同じことをしているということも含めて交通規則への軽視が見られるのではないかとと思われる。両親には話してませんといっているが、30も後半になって同居している両親にはさぞ言いにくいことであろう。最後に言い訳ばかりして恥ずかしいという旨の反省をしていたが、分かっているのであればもう少し素直に反省の態度を見せたらどうかと思った。再犯が懸念される。

④他人へキャッシュカードを渡す目的で、銀行から通帳とキャッシュカードを騙し取り、それを売買した一連の詐欺事件

(概要)

振り込み詐欺グループへの口座売買に関する事件であるが、元締めミサワへ通帳が行くまでに二人も仲介が入っていることに大変驚いた。また証人Cは2万円をピンハネし、末端のAやBは8千～1万円を得るのに対して、今回の被告人は2千～3千円しか儲けられていない。大変効率の悪い「シノギ」である。Aは同件で執行猶予中、Bは不明、Cは公判中、ミサワと呼ばれる人物は所在自体不明とのことであった。A・Cの両証人によって上記のような事件の構図が語られた。

(感想)

ドラマを見ているようであった。内容云々というより、被告人の友人たちで埋め尽くされた傍聴席は圧巻であった。後半の終わりには被告人に完成が送られていた。

⑤自営業による道路交通法違反

(概要)

マージャンをするために免許がないにもかかわらず車を運転し、自損事故を起こす。飲酒運転の執行猶予期間が明けてすぐのできごとで、事故では自分が大怪我をしている。

(感想)

本人は前件で免許が失効した際にも、仕事で仕方なく無免許運転を繰り返していたとしている。マージャンの目的でも数回はあったとっている。証人として妻が登場し、運転していたことを感知できていなかったこと、今後このようなことがないように監督することを涙ながらに訴えていた。ドラマのようだ。被告人は自損事故で全身の骨を折る大怪我を負っているのに、確かに身をもって自分の行為を思い知ったのだが、裁判をされている立場にもかかわらず、なぜか大変横柄な態度で受け答えを行っている。言い訳をするよりはましであったが、反省している感じではなかった。

【まとめ】

以上五件について言えることでありますが、被告人たちは一様にあからさまに言われていると分かるような言い方で、『大変反省しております。』といていたところがとても印象に残りました。客観的に視るとこのような状況で言い訳を重ねても意味はないと思うのですが、いざあそこに立つとそのような心理にはなれなくなってしまうのでしょうか。③件目の被告人は自分の裁判が終了した後も、ずっと傍聴をしていました。何を考えて傍聴していたのかと思うと大変不思議な気持ちになります。裁判長については本当にすごい職業だと感じました。罪を犯してしまった人たちに、慈悲深い目で罪の意識を考えさせたり、更正を促したりと、どの人にも平等に真正面から接していました。もし自分なら精神が持ちません。裁判長の並々ならぬプロ意識、徳の高さを強く感じました。自分は裁判を傍聴したのは今回が初めてでしたが、今後ぜひまた傍聴をしたいと強く思いました。」

受講学生・乙

「1つめは道路交通法違反（無免許運転など）・偽装・強要未遂の裁判でした。免許を1度も取ったことがないのかかわらず、他人の免許証を偽装し、検挙されそうになり交通違反を繰り返し逃げました。また、町役場の担当の人を家に呼びつけ、強迫するなどの行為を行いました。出所後わずか3年での犯行です。自分の思い通りにしたいという、自分勝手なものばかりだと裁判官は言っていました。懲役4年実刑と判決されました。有罪なので、14日以内だと不服の申し立てができます。

2つめは窃盗の裁判でした。自営業が倒産したことで、働けず食事に困り食品の窃盗を行ったとのこ

とです。被告人の兄が協力し、住まいや食事などを提供するとなったので、生活が改善され犯行も行わないはずだということで執行猶予になりました。人の税金により生活保護を受けることになったので、人のために出来ることは進んでやるようにと裁判官が被告人に伝えました。懲役1年、執行猶予5年と判決されました。しかし、執行猶予には保護観察付きです。

3つめは前の裁判で聞いた詐欺についての続きでした。証人が今回も2人出てきました。1人めは被告人のおばでした。おばは、ペットショップのブリーダーをしていて、被告人が出所してからブリーダーのお手伝いをさせていたそうです。給料というよりはお小遣いとしてお金を被告人に与えていたと言います。また、被告人は自分の実家の焼き鳥屋もかけもちでしていました。2人めの証人は被告人も元雇い主でした。その証人は造園業を営んでいて、人手が足りないことから被告人を雇うようになりました。しかし、被告人の親の体調が悪くなったため造園業の仕事は辞めたそうです。この証人の尋問の時に、証人の手帳のコピーを用いる部分がありました。その時、弁護人・証人・検察官の3人が手帳を見ていて、弁護人が証人に質問を投げかけていました。最後に被告人が尋問されました。被告人は弁護人の質問に答え、通帳詐欺には関わっていないと断言しました。証人たちが被告人に通帳詐欺を勧められたと言っていたが、それは何かの勘違いだとはっきり言いました。検察官は、それに対し、矛盾点を細かくするどい質問を投げかけ続けました。そして裁判官からも厳しい質問をいくつか投げかけられていました。今まで見た裁判の中で、1番白熱していたかのように感じました。

4つめは窃盗の裁判でした。被告人は万引きと恐喝で執行猶予中でしたが、とある家電用品店で窃盗を行いました。被告人は交通事故にあい、その後のうつ病から4年間無職だそうです。証人として被告人の妻が出てきました。妻によると被告人は睡眠薬を過剰摂取したせいでそのような窃盗を行ったと言います。薬の量が自分でコントロールできずに飲んでしまい、窃盗や恐喝などの犯罪を犯すということです。だからこれからは妻である自分が薬を管理し、一緒に病気を治していくと宣言しました。しかし、検察官や裁判官は矛盾点を見つけ出し、質問を繰り返していました。今回で判決は出ず、また次回に続くそうです。

5つめは強迫についての裁判でした。被告人は同僚に『昔ヤクザだったから言うことを聞け！金を貸せ！』と強迫しお金を借りていました。証人は被告人の姉で、その同僚から借りたお金は全て姉の自分が用意し、返したそうです。証人は、弟がそんなことをするなんて信じられないなどと長々と質問の意図と違うことを話して、裁判官に、簡潔に質問の内容に答えるようにと注意されていました。この裁判も決まらず、次回に続きます。

裁判は予定より少し長引きました。

私は、検察官と弁護人と裁判官のするどい質問に少し驚きました。裁判のドラマなどを見たことがありますが、本当にビリビリした緊張感の中行われるんだと再確認しました。そして、尋問だけでなく、証人に資料を見せながら尋問することもあるということを知りました。1つの問題も、何度も裁判を繰り返して正しい判決が出されます。正しい判決を導き出すためには、多少厳しい質問や細かい質問が必要になってくるんだと思いました。」

受講学生・丙

「裁判を傍聴するのは初めてである。まず、裁判官と検察官の早口に驚いた。日々、仕事として発言している文言であるから、慣れているのであろう。しかし、被告人に言い聞かせるような重要な発言には、

ゆっくりと諭すような声で話していた。裁判と聞くと、お役所的なで事務的なものだと思っていたので、裁判官もやはり人間だと感じた。判決については、前科を重要視していること、また仕事や人間関係もかなり考慮されていたと思った。今回の裁判を傍聴して共通していることは、『楽にお金を受けとれる仕事は犯罪と繋がっている』ということである。このことを心に留めて生きていきたいと思う。

5 教員参加型授業参観プロジェクトー阿部先生の講義

阿部秀二郎准教授を中心に、教務委員会が主体となって、「持続可能なグローバリゼーション」という科目名で、学生参画型FD的な授業（阿部氏の表現では共同的な大学院学生教育指導を目的としている授業）が数年前より開講され、その成果が徐々に現れ始めてきたように思われる。当該授業の狙いは、「大学院学生のボランタイルな報告活動→報告会→報告会のためのトレーニング→その中で認識された有益性」である。さらに、阿部氏によれば、①互いの専門研究内容について相互が学習でき、②報告会に向けてのトレーニングとなり、③孤立化しない、授業情報などの共有化、という3つの有益性が存在するという。

当該授業の具体的な方式は、毎回、受講学生の中から、司会者とタイムキーパーをそれぞれ1名ずつ、報告者は4・5名とし、各報告に指定質問者2名を決めておき、全体進行は阿部氏がされ、報告する大学院生の指導教員が可能な限り参加する（残念ながら極めて少ないようである）というものである。報告者は1週間前までに報告要旨を作成し、受講学生は大学が用意しているネット上のLive Campusで、それをダウンロードし、事前に目を通した上で授業に参加する形式となっている。授業当日は「報告概要と質問」表に記入し、それを阿部氏が回収・チェックした上で、後日、報告者に渡され、報告者は質問に対して回答を用意し、阿部氏を経由して質問者に返却される。

科目名称は上記の通りであるが、実際は各大学院生の専門テーマに沿ったものであり、各報告に対して積極的な質疑応答がなされている。受講している大学院生は圧倒的に中国人留学生が多く、日本語能力の向上に関しては極めて有益であると感じられた。また、基礎学力向上には打って付けでもある。大学院生は原則として当該科目に全員参加ということになっているが、必修化されていないため、受講者数は約半数の30～40名である。ただ、報告者数と時間的な事情などを考慮すれば、結果的には理想的な人数であると思われる。数年前から実施されている、修士論文の中間報告会や最終報告会の予定演習として素晴らしい授業ではないかとも考えられる。なお、諸事情があるとはいえ、指導教員の参加が極めて少ないことは実に残念である。自分が指導している大学院生の研究状況を把握し、プレゼン能力を確認することができる絶好の機会である（自分の指導する大学院生の発表を聴いて実感した）だけに、万難を排して参加すべきではなかろうかと思われる。

当該科目の名称はともかく、大学院におけるFDとして、阿部氏を中心とする教務委員会の

授業改善に対する、ここ数年間の努力が結実して来たように思われる実践活動である。

そして、当該科目に関して何度か参観して、授業参観コメントシートを阿部先生と和歌山大学教務課とに送付した。FDとして実にすぐれた取り組みであると思い、そのように記述したつもりであるが、その一部を以下に掲載する。

平成 25 年 6 月 13 日に参観させていただいた際の筆者から阿部先生へのコメント

「昨年度も参観させていただきまして、大学院のFD（授業改善）、とりわけ学生参画型授業の改善として、実に相応しい講義であると確信致しましたので、今年度も参観させていただきました。できるだけ多くの経済学部教員が参観すれば、大学院経済学研究科におけるFD活動として高く評価されるものと考えております。

受講者の8割程度が中国人留学生であることで、日本語能力向上に有益な講義でもあると思います。日本語能力がまだまだという学生も存在しているのは間違いないとは思いますが、Tさんのような素晴らしい会話能力を持った人もいることに驚きました。他にも数人は日本人学生顔負けの議論ができる受講生がいるとは思いますが、今回は、Tさんの日本語能力が秀逸であると感じました。

さらに、本来の狙いと推測致しますが、修士論文作成に関する手ほどきとしての本講義の存在価値が極めて高く評価できると思っております。そのためにも、経済学研究科の教員が、それも指導教員や副指導教員はもちろんとしまして、専門に近い教員の参加が不可欠かと拝察致します。

欲張ったことを申しますと、日本人学生がもっと受講してくれたらと思うのですが、M1の在籍数の約三分の二が中国人留学生であることから、致し方のないところかなとも思います。

講義の進行に関しまして、『報告概要と質問』のプリントを配布され、提出させるという手法は非常に有意義であると感じました。受講生全てが活発に質問できる資質を持っているとは限りませんが、紙媒体で書かせることにより、引っ込み思案な学生でも報告をしっかりと聞き、批判したり賛成したりしていることを把握できると思われるからです。

報告者・質問者・司会者・タイムキーパーという役割分担も、講義進行に関する有益な装置（道具立て）になっていると思います。以前からも阿部先生の本講義に対する注力の賜物であると拝察致します。

もし、使用されていたパソコンが、経済学部教務係の管理下の物品ではなく、経済学研究科が大学院生のために用意したものであれば、大学院生にパワーポイントも操作してもらうことができ、さらに学生参画型授業として磨きがかかったものに評価されることになると思います。」

平成 25 年 7 月 11 日に参観させていただいた際の筆者から阿部先生へのコメント

「6月14日に参観させていただき、非常に興味深く、今回が最終日となるということで、再度、参観させていただきました。後期も同じような科目が行われるということでしたので、後期にも参観させていただければ幸いです。

中国人留学生が非常に多く、講義中は日本語で議論されていましたが、講義終了後は、中国語が飛び交っておりまして、まるで自分自身が中国に留学しているかのような感覚に陥りそうでした。

Yさんが書かれました、Yさんの『報告に対する質問の回答』には感服致しました。実に低レベルの質問や、抽象的で回答しにくい質問に対して、丁寧にご回答なさっていただき、長時間を要したのでは

ないかと拝察致します。Yさんご自身の勉強にもなったとは思いますが、大変なお骨折りではなかったのかなと頭の下がる思いを致しました。

本日はパワーポイントを使用した報告がございましたが、非常に理解しやすく、修士論文の中間報告や最終報告にはレジュメだけではなく、パワーポイントによる発表を期待したいと強く感じました。文章だけでの報告では全くダメというわけではありませんが、聴き手の理解しやすさを考慮しますと、パワーポイントの利用は極めて有効であると感じました。

貴講義は大学院における学生参画型のもので、特に外国人留学生に有意義であり（もちろん日本人学生にも有益ですが）、必修化も視野に入れたらと思うのですが、毎回4名に報告してもらい、7回の講義回数と考えますと、受講生数は28名以下が適当であると考えます。大学院の定員が38名×2の76名としますと必修化は困難とも感じます。従いまして、専攻を問わず、受講するのが望ましい科目として位置づけるのが適当ではないかと判断致します。

最後に、前回のコメントシートにも書いたことではありますが、指導教員や副指導教員の都合がつけば是非とも参加してもらいたいように思いました。

平成25年10月31日に参観させていただいた際の筆者から阿部先生へのコメント

「以前より、大学院のFDとして最適な科目であると確信して参観させていただきました。定員確保のために、学力には目をつぶり、多くの外国人留学生を合格させた結果、レベル低下が公然と叫ばれる中、この授業は、日本語能力の底上げと、議論する能力や講義に積極的に参加しようという意欲を向上させるのに打って付けであるように思っております。

ただ、残念なことは、日本人学生の参加や、教員の参加が少ないことです。自身が指導しております2年生二人（一人は日本人ですが、もう一人はベトナム人です）に、今年の4月、受講登録させなかったことは実に手痛いミスだと思っています。（修士論文作成のために受講登録科目数を最小限にしたいという申し出を、安易に受け入れてしまったことが原因です。）

本日の4つの報告の中では、レジュメのファイルを作成するのみならず、別個にパワーポイントファイルを作成して発表されたのがございました。修士課程の2年生ならば当然とは思いますが、1年生でしたので、素晴らしいと思います。4名とも、内容的には、まだまだ不十分とは思いますが、外国人留学生でありながら、日本語で報告しているわけですので、その点に関しまして高く評価できると考えます。

前回の研究科会議で、すべての大学院生はできる限り、この授業を受けることとなりましたが、参加学生数は、本日くらいが適当なように感じました。もし、70～80名程度になりましたら多すぎるのではないかと感じます。1回あたりの報告者数と授業回数から判断しますと30名程度が無難ではないかと思っています。

また、本講義は修士論文の中間報告や最終報告のリハーサルとしても実に有意義なものでございます。それゆえ、小生が指導しております、次回の報告を辞退しました1年生には、在学している間はずっと（2年で修了させるのではなく、3年で修了させます）受講するよう指導致しますので、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。」

平成25年11月25日に参観させていただいた際の筆者から阿部先生へのコメント

「今年度、4回目の授業参観になると思います。当該科目が大学院のFDとして、実に打って付けの科

目であると確信して、参観させていただきました。授業参観の期間は11月29日までとなっておりますが、教授会や各種委員会がなければ、12月や1月の授業も参観させていただく所存です。

（前のコメントシートでも書いたことではございます）以前の研究科会議で、大学院生はM1・M2を問わず、できる限り参加することとなったように思いますが、机や椅子の数、全回を通しての報告者数、フロアから質問するに当たっての諸事情を考慮しますと、受講者数は30名程度が理想的であるように感じます。その点から、当該科目の必修化は避けていただければ幸いです。

今年度の受講者は圧倒的に中国人留学生が多く、参観教員の立場からしますと、外国人留学生の日本語能力を把握するには極めて有益な授業であると感じております。日本人かと間違ふほど日本語が堪能な中国人留学生が相当数受講している反面、小生が指導しておりますM1の学生（片言の日本語しか話せません）より、少し上手な程度の日本語能力の学生が少なからず受講していることもわかりました。もし、多くの日本人の大学院生が受講していましたら、言葉の面で問題が発生するかもしれないと感じました。（具体的には、日本語の上手な外国人学生ばかりではございませんので、日本人学生が、日本語の拙い外国人学生の発表に耐えられない場面が生じかねないと思います。）

来年度以降の授業では、日本人学生としまして、Yさんのような「オトナ（学問に真剣かつ熱心で、他の学生に思いやりがあるという意味です）」の受講生がもっと来てくれたら、他の受講生に刺激となって非常に良いと思います。一般的に社会人特別入試で入学される方々は、Yさんのような特長を具備されているように感じます。この授業は、典型的な学生参画型授業で、他の従来型のありふれた授業に比較して、授業の質に大きく影響を及ぼすのは、受講生の積極性や意欲だと思います。その点で、今年度は、YさんとTさん（他、数名の中国人留学生）の存在は極めて大きいように感じます。本日の最後の報告者でしたRさん（M1だと思います）のような、日本語の上手な方が来年度、牽引者となられることを期待致します。」

平成25年12月19日に参観させていただいた際の筆者から阿部先生へのコメント

「今年度、5回目の授業参観になると思います。以前にも書きましたように、当該科目が大学院のFDとして、実に素晴らしい科目であると確信して、参観させていただきました。入学者定員を充足することが極めて困難で、学力に問題のある受験生でも合格させざるを得ない大学院経済学研究科の重要な課題を改善する科目として、実に好適な講義であると考えております。

今回3名の発表がございました。そして、阿部先生がご指摘なされたように、パワーポイントを利用されたTさんと、レジュメだけを利用された他のお二人の発表とは明確に違いが感じられました。80名程度在籍している大学院経済学研究科の正規生の中で、屈指の学力を持つと思われるTさんと同じ形式でさえ差異が感じられるに違いないのに、発表方法が異なり、日本語能力でも格段の差がございましたので、Tさんの優秀さが、ひときわ目立った講義であったと感じました。Tさんに、日本人学生でも互角に渡り合えるのは、阿部先生がご指導なされているYさんだけではないかとも思われます。もちろん、定年退職なされてから、経済学部の人特別入試に合格して、学部1年から本格的な研究を開始し、大学院経済学研究科に進学し、経済学の研究を中心に、その他の分野でも研鑽を積んでおられますYさんにも頭の下がる思いが致します。さらに、何人か、実に日本語に堪能な中国人留学生が受講されていることもわかり、あらゆる面で恵まれています（Yさん以外の）日本人の大学院生に比較し、大学院研究科のトップレベルは非常に優秀であるということが実感できる講義だと思います。

修士論文の日本語に関しまして、さまざまな人に読んでもらい、アドバイスを受けることが非常に有益であると阿部先生が講義の最後に仰いましたので、上記のTさんが小職に修士論文を読んで欲しいと依頼してきたことには面食らいました。民法を専門にしておりますので、経営に関することは全く門外漢で、日本語の言い回しに関するアドバイスしかできないと申しまして、やんわりと拒否したつもりでしたが、それでも構いませんので是非ともお願いしたいと強く希望されましたので、引き受けました。内容的にはサッパリ判りませんでしたが、実に素晴らしい日本語能力を身につけておられ、日本人大学院生の文章力に勝るとも劣らないレベルでした。強いて言えば、外国人には理解しがたい日本語の言い回しに若干の問題がありました。それにしましても、これほど日本語能力に秀でた外国人大学院生がいるということに驚かされました。」

平成 26 年 10 月 16 日に参観させていただいた際の筆者から阿部先生へのコメント

「この授業を選出した理由は、大学院のFDとして極めて意義深いと思っているからです。現在、大学院経済学研究科の4分の3近くは中国人留学生で、和歌山大学の外国人教員よりも日本語が上手であると思われるほどの学生から、片言しか話せない程度の学生まで千差万別と言っても過言ではないと思います。そのような状況下、専攻を問わず、学生が司会し、報告をする本授業は、外国人留学生の日本語能力を知る絶好の機会であります。また、受講学生の指導教員に取りましては、指導している大学院生の興味・関心がどこにあるのかを知ることでもあります。本来は、『専門研究』でよく話し合うべきことですが、本授業では別の視点から指導院生の興味・関心を察知することができるように思います。

外国人留学生の受講生の視点から考察すれば、他の大学院生が如何なる分野を専攻し、問題意識を有しているかを知ることができ、教員に質問しにくいことでも大学院生には質問する場合があるのであって、その参考になる契機として実に有意義であると思います。もし、日本人学生がもっと多数参加していれば、日本語を教えてもらうきっかけにもなると思うのですが、ほんの数人しか受講していないのが残念です。

また、これまで授業参観コメントシートで、何度も記述しましたが、報告を担当する大学院生の指導教員には、報告時だけでも、是非とも、参加していただきたいと感じております。毎回、阿部先生や岡田先生がご指導なされ、複数名の教員が参観している場合もあるとはいえ、報告者のテーマにマッチングする教員が参観しているとは限りません。今年度は教授会の開催されない木曜の午後に割り当てられておりますので、報告を担当する大学院生の指導教員または副指導教員の参観を切望致します。

前期までは、経済学部南棟の2階の講義室で開催されていましたが、少し狭く、今期はE-201講義室となり、十分な数の机と椅子が確保され、多数の参観教員が押し寄せても収容できると思いますので、従来以上の教員の参観を期待したいところです。

自分が担当する授業に活かしたいこととしては、今期、基礎演習2を初めて担当することになり、プレゼンテーション能力やディスカッション能力を涵養させる必要があり、本授業は大いに参考になります。21名在籍しておりますので、4・5名を一組として、5グループに分け、1グループが1コマの報告を担当し、他の4グループが質問をし、報告グループが回答する形式にしようと計画しています。月曜に割り当てられましたので、まだ1回しか消化しておらず、授業方法を説明し、受講学生が理解してくれただけで、実践には至っておりませんが、本授業を参観させていただいた成果・効能を発揮することができればと思っております。」

おわりに

大学院では学部よりも1年早くFD（ファカルティ・ディベロップメント）が義務づけられたにも拘わらず、ほとんどの大学院で授業改善は取り組まれていないように思われる。むしろ、景気低迷が続く中、通常の学部4年生で大学院への進学希望者が減少し、大学院生の学力低下が進行しているため、授業改善に取り組むたくても、取り組めないと言う方が適切かもしれない。本稿は、そんな状況下で、和歌山大学大学院経済学研究科の法学系科目を中心に授業改善を模索しようとしたものである。法学に関する基礎学力を有していないのに、従前より相当に増加している外国人留学生や社会人学生にも、マルチメディアの利用や裁判傍聴などを試行して、馴染みやすく、学力向上に実効性のある、経済学研究科における法学系科目の授業改善を実施し、その効果を大学院生の声を掲載して検証の代わりとする。

なお、今後も、受講学生に刑事裁判や離婚裁判などを傍聴したり、裁判所や弁護士会などが開催する一般市民向けイベントに参加したりすることを奨励して、動機付けを高め、入学時の低学力を少しでも高めることを計画している。フィールドワークとして、裁判の傍聴や、裁判所・弁護士会等が実施するイベントへの参加を奨励したい。自分自身は当然参加するが、大学院生にも可能な限り、参加するように促し、他の講義に差し支えない限り、案内する予定である。近年、20才代の大学院生に公務員志望者が大幅に増加しており、公務員試験採用試験受験者は、裁判所事務官採用試験も併願する傾向にあり、そのような大学院生には是非とも参加するように勧めたい。

和歌山地方裁判所には、これまで何度も参加していることと、和歌山家庭裁判所の家事調停委員や参与員も依頼されていることから、イベント開催のたびに先方より連絡をもらっており、地理的に問題なく、大学院経済学研究科の大学院生を引率してゆくことができる。

和歌山弁護士会には法教育委員会があり、小・中・高等学校と交流しての法教育が盛んだそうであるが、近年においては、大学生や大学院生の法教育にも乗り出そうということになったそう。数年前、学部ゼミ生や研究指導をしている大学院生を引率して、和歌山弁護士会の建物の中で刑事訴訟の流れに関するレクチャーを受け、その直後に刑事裁判を傍聴したことがあり、今後も提携関係を構築してゆくことができれば幸いである。

また、法律関係のイベントでは法学教育に有意義な資料が配布されることが非常に多く、東京や大阪、その他、遠方でも開催されるイベントには都合のつく限り参加して、法学関係の講義に還元させたい。国民生活センターや東京都消費生活総合センターでも、法学教育の重要な部分である消費者教育に関する行事が実施されているので参加したい。和歌山県消費生活センターにも消費生活に関するDVDやビデオが収蔵されており、借用して講義で上映できれば幸いである。

講義で使用を計画している教材名を具体的に挙げると、山崎豊子原作の『白い巨塔』が新潮

文庫から発行されているが、映画化ならびにテレビドラマ化されており、医療事故に伴う民法上の損害賠償と、その民事裁判の最適なメディアである。その他の映画では痴漢の冤罪事件を取り上げた周防正行監督の「それでもボクはやってない」があり、テレビ番組では、フジテレビ系列で放送された「離婚弁護士」や「リーガル・ハイ」、NHKの「生活ほっとモーニング」の法律関係の特集、同じくNHKのドラマ「ジャッジ」および「ジャッジⅡ」ならびに「マチベン」、マンガでは、『カバチタレ!』と続編の『特上・カバチ』、『ナニワ金融道』、シネマ化もされた『ミナミの帝王』、『弁護士のくず』、文学作品としては、宮部みゆきの『火車』や『理由』などを挙げるができる。

社会人学生が多い岸和田サテライトや南紀熊野サテライトでは、平日にフィールドワークを試みることは不可能であるが、土曜・日曜・祝日には各種イベントに参加することは可能であり、栄谷の学生に比較して経済的に恵まれており、東京や京阪神で開催される法律関係の行事への参加を募ってみることを考えている。さらに年齢的なことから、昭和40年代や50年代の映画を見せると、非常に興味を示してくれるのであって、数年前に南紀熊野サテライトで開講した大学院科目の「現代社会と民法」で、山崎豊子原作の『女系家族』が相続を扱っているために上映したのであるが、極めて好評であった。20才代の大学院生や外国人留学生では興味を示してくれるか否か、非常に不安であるが、定年退職をして生涯学習に励んでいる社会人学生にとっては、実に懐かしく、内容的にも素晴らしい法律の教材であると評価された。このあたりの大学院生の個人的特性も考慮して、今後も大学院の授業改善に取り組んでゆきたい。

参考文献

- 吉田雅章「FD活動と『PL法』」『経済理論』295号, 2000年
吉田雅章「和歌山大学におけるFDの実践報告」『京都大学高等教育研究第6号』, 2000年
吉田雅章「公開授業『日々のくらしと法律』と授業改善」『メディア教育開発センター研究報告第21号』, 2001年
吉田雅章「法学教養科目における授業改善」『経済理論』302号, 2001年
吉田雅章「組織のFD活動と個人の授業改善」『京都大学高等教育研究第7号』, 2001年
吉田雅章「和歌山大学における公開授業」『京都大学高等教育研究第8号』, 2002年
吉田雅章「法学系科目の授業改善と学生参加型授業参観プロジェクト」『和歌山大学経済学会・研究年報第14号』, 2010年

Improving Graduate School Classes: Especially in Legal Lectures

Masaaki YOSHIDA

Abstract

Recently graduate schools have been finding it difficult to enroll enough students, but there has been a remarkable drop in ability among candidates. This study examines improvements that could be made to classes for students, particularly in legal subjects as the author is majoring in civil law. Four different areas for improving classes are examined: listening to students' voices, watching TV programs and movies, observing real criminal trials held in Wakayama District Court, and mutual attendance of lectures and exchange of opinions among professors.